

宇都宮大学地域デザイン科学部コミュニティデザイン学科
2020 年度卒業論文

新時代の J リーグーコロナ禍を経た J リーグの未来ー

指導教官名 中村祐司

学籍番号 179114B

論文執筆者名 川口直樹

要旨

2020年の初頭から流行が始まり、瞬く間に全世界へと拡散した新型コロナウイルスは、神羅万象に大きな影響を与えている。日本のプロサッカーリーグであるJリーグも大きな打撃を受けた。4か月にも及ぶ公式戦延期に留まらず、Jリーグが重視する地域貢献活動も含めた一切の活動が休止した時期もあった。今回のようなサッカーに関われない時期において、プロサッカークラブの存在意義とは何なのか。サッカーに関わる全ての人々が改めて考える機会になった。そしてリーグ戦再開後は、これまでとは大きく変わったJリーグの姿があった。本論文では、コロナ禍で変貌したスタジアムや新しく登場した応援スタイルなどから今後のJリーグの姿を考察する。

第1章では前提知識として、Jリーグの基本情報について述べる。Jリーグの歴史や概要に加え、Jリーグが大切にしている地域貢献活動にも触れる。

第2章では主にリーグ戦中断期間中のクラブの取り組みについて述べる。本論文はJリーグについて述べたものだが、スタジアムの活用に関しては日本での事例が少なかつたため、海外の事例も引用している。

第3章ではJリーグ再開に向けた動きについて述べる。大会方式や日程の変更について、また現在ではだいぶ浸透した印象のある「リモートマッチ」という言葉が生まれた背景について詳述する。

第4章では新しい観戦様式について述べる。スタジアムに行けない、またスタジアムにいても声を出せないという状況で、デジタルを活用した新たな応援システムが誕生した。再開直後に各クラブ1~2試合実施されたリモートマッチでは、声がないと言う状況や空席のスタンドを前に、各クラブの対応に違いが見られた。

第5章では応援と入場の制限、その緩和の変遷について述べる。この2つは国内の感染状況や政府方針に大きく左右された。

第6章では新型コロナウイルスによる各方面への影響について述べる。再開後、リーグ全体としては概ね順調に日程を消化してきたが、クラブ単位で見ると所属選手やスタッフの陽性判定により、突如の試合中止やチーム活動休止に追い込まれた事例もあった。クラブ経営を揺るがすような影響については、今後も注視していく必要がある。

第7章ではリーグが再開して見えてきたことについて述べる。リモートマッチ、チャント（応援歌）のないスタジアムは寂しいものではあるが、ポジティブな要素もあった。しかし何より問題になったのは、ファン・サポーターのマナー問題であった。

第8章では前章までの内容と筆者の観戦経験も踏まえ今後のJリーグの変化について考察する。この章では観戦上の変化とサッカーの根幹に関わる内容について、個別に5つの論点を取り上げる。

おわりに「Jリーグの風景」を形作る重要な要素である「応援規制」と「入場制限」の行方について改めて触れ、本論文の総括としている。

目次

要旨.....	2
はじめに	4
第1章 Jリーグとは何か	5
第1節 Jリーグの歴史と概要.....	5
第2節 Jリーグと地域	6
第2章 新型コロナウイルス禍のJリーグ.....	10
第1節 デジタルを活用した取り組み	10
第2節 スタジアムを活用した取り組み.....	11
第3章 Jリーグ再開に向けて	14
第1節 再開へ向けた動き	14
第2節 「無観客試合」を「リモートマッチ」へ.....	16
第4章 新しい観戦様式.....	18
第1節 デジタル応援システム	18
第2節 リモートマッチにおける応援スタイル.....	22
第3節 リモートマッチにおけるスタンド.....	23
第5章 規制と緩和の変遷.....	26
第1節 応援規制とその緩和.....	26
第2節 入場規制とその緩和.....	28
第6章 新型コロナウイルスによる影響	32
第1節 試合開催への影響	32
第2節 チーム活動への影響.....	34
第3節 クラブ経営への影響.....	36
第7章 再開して見えたこと	38
第8章 今後のJリーグの姿.....	40
第1節 スタジアム観戦における変化	40
第2節 サッカーのルールに関わる変化.....	42
おわりに	45

はじめに

日本プロサッカーのJリーグは、1993年の開幕から今年で27年目を迎えた。往年のスター選手を揃え華々しく幕を開け、一時は人気に陰りが見られたが、最近はその人気が再燃しつつある。

国内サッカー人気再燃のきっかけの1つに2018年夏にロシアで行われたFIFAワールドカップが挙げられる。下馬評の低かった日本代表が躍進を見せた。悲願のベスト8には届かなかったものの、決勝トーナメント1回戦では優勝候補のベルギー代表をあと一步のところまで追いつめた。

代表チームだけでなく、日本のプロサッカーリーグであるJリーグの動きも活発になっている。2018年ワールドカップ終了後の8月には、ヴィッセル神戸に元スペイン代表のミッドフィールダー、アンドレス・イニエスタが加入した。名実ともに世界屈指のスーパースターの日本上陸は全世界を驚かせた。このイニエスタを始め、長く世界の第一線で活躍してきたスター選手たちが、新たな活躍の場として日本を選ぶことも多くなってきた。そして2017年には浦和レッズ、2018年には鹿島アントラーズが、アジア最強クラブを決めるアジアチャンピオンズリーグ(ACL)で優勝し、2年連続で日本勢がアジアの頂点に立った。2019年も浦和レッズが決勝に進出している。2008年にガンバ大阪が優勝して以来、苦戦が続いていたアジアの舞台での存在感が高まってきている。Jリーグを取り巻く環境は確実に変化しており、その人気の高まりは数字としても表れている。日本のトップリーグであるJ1リーグでは2019年、創設27年目にして初めて、平均観客数が2万人の大台を超えた。オリンピックイヤーとなる2020年、Jリーグのさらなる飛躍が期待された。

そんな矢先に突如現れたのが新型コロナウイルスである。その流行に伴い、Jリーグは2月下旬から約4か月間の中断を強いられた。試合はおろかトレーニングも、地域貢献活動もできない時期がこれほどまでに長く続くというのは異例の事態であった。これまで当たり前のように享受してきた「Jリーグのある日常」は、これほどまでに簡単に崩れ去ってしまうのかと、Jリーグに関わる全ての人が驚いたことだろう。6月下旬から再開されたJリーグは、大きな混乱なく日程を消化してきた。しかし入場制限や応援規制は継続され、コロナ前の姿には戻っていない。いつ、コロナ前の風景を取り戻せるのか予測はできず、サッカー界も大きな変化を迫られているのかもしれない。

東日本大震災が発生した2011年もリーグ戦が一時中止された。しかし、当時は1か月強の中断で済み、4月下旬には再開された。3月下旬には復興支援のチャリティーマッチが開催され、リーグ戦は中断していたがサッカーの力で日本中に勇気と感動を与えることができた。しかし感染症の猛威に晒される今回は全く状況が異なり、自然災害時とはまた違う対処が求められることを思い知った。

本論文では、今後のJリーグはどのような変貌を遂げるのか、新型コロナウイルスによる影響を考察しつつ考えてみたい。

第1章 Jリーグとは何か

第1節 Jリーグの歴史と概要

日本プロサッカーリーグ（Jリーグ）の創設は1991年の11月まで遡る¹。1965年に創設・開始されJリーグの基礎となった日本サッカーリーグ（JSL）をプロ化しようという動きが1980年代後半から広がり、90年3月にプロリーグ参加の条件を決定、91年2月にはプロリーグ参加団体10団体が決定した。92年、Jリーグの前哨戦となる「'92Jリーグヤマザキナビスコカップ」の開催を経て、1993年5月15日にJリーグが開幕した。Jリーグ発足時に加盟した鹿島アントラーズ、ジェフユナイテッド市原、浦和レッドダイヤモンズ、ヴェルディ川崎、横浜マリノス、横浜フリューゲルス、清水エスパルス、名古屋グランパスエイト、ガンバ大阪、サンフレッチェ広島の10クラブは「オリジナル10」と呼ばれている。なお、横浜マリノスに吸収合併された横浜フリューゲルスが1999年に消滅したため、現存するオリジナル10は9クラブとなっている。また、横浜フリューゲルスを吸収合併した横浜マリノスは「横浜F・マリノス」に名称を変え、本拠地を神奈川県川崎市から東京都に移したヴェルディ川崎は現在「東京ヴェルディ」の名で活動している。

1999年には1・2部制が開始した。これによりJリーグはJ1リーグとJ2リーグという2つのカテゴリーに分かれることになった。なお、この時点でJ1に16クラブ、J2に10クラブが加盟していた。

その後もチーム数は増加し続け、2014年にはJ1、J2に次ぐ3つ目のカテゴリーとなるJ3リーグが発足した。現在までこの3カテゴリー制でリーグ戦が開催されており、2021シーズンはJ1が20チーム、J2が22チーム、J3が15チームの計57チームが参加する（例年、J1リーグは18チームが参加するが、2020シーズンにJ1からJ2への降格がなかった影響で、2021シーズンは20チームでの開催となる）。長らくJリーグクラブが存在しなかった青森県と宮崎県から2019年にヴァンラーレ八戸が、2021年にはテゲバジャーロ宮崎がJ3参入を果たし、今やJリーグのクラブが存在しないのは福井県、滋賀県、三重県、奈良県、和歌山県、島根県、高知県の7県のみという規模にまで拡大している。これらの県でも、ヴィアティン三重や奈良クラブなどがJ3のクラブライセンスを取得し、将来のJリーグ加盟を目指して戦っている。47全ての都道府県にJクラブが存在する時代も遠くないかもしれない。

¹ Jリーグ公式ウェブサイト「About Jリーグ：Jリーグの歴史」
<https://www.jleague.jp/aboutj/history/>（2020年4月17日閲覧）

第2節 Jリーグと地域

Jリーグはプロサッカーリーグであり、もちろんサッカーが主目的である。しかし、ただトレーニング、そして試合とサッカーだけに興じている集団ではない。次の条文にJクラブの理想像がよく表れている。

Jリーグ規約第21条〔Jクラブのホームタウン（本拠地）〕第2項

「Jクラブはそれぞれのホームタウンにおいて、地域社会と一体となったクラブづくり（社会貢献活動含む）を行い、サッカーをはじめとするスポーツの普及および振興に努めなければならない。」

JリーグではJクラブの本拠地を「ホームタウン」と呼んでいる。「Jリーグ規約」では、ホームタウンと定めた地域でサッカーの普及と振興はもちろん、その地域社会と一体となったクラブづくりをすることが求められている。ホームタウンとは「本拠地占有権」、「興行権」の意味合いの強い「フランチャイズ」とは異なり、「Jクラブが地域社会と一体となって実現する、スポーツが生活に溶け込み、人々が心身の健康と生活の楽しみを享受することができる町」を意味している²。

このJリーグが掲げる理念の下、Jクラブは地域貢献活動に積極的に取り組んでいる。2019年にはJ1、J2、J3に所属する全55クラブで合計25,287回の活動を行った³。活動目的の構成、協働者は以下の通りである。

² Jリーグ公式ウェブサイト「ホームタウン活動・シャレン！とは？」
<https://www.jleague.jp/aboutj/hometown/>（2020年9月29日閲覧）

³ Jリーグ ホームタウン活動調査2019年版
<https://www.jleague.jp/docs/aboutj/hometown/2019-hometown.pdf>
（2020年9月27日閲覧）

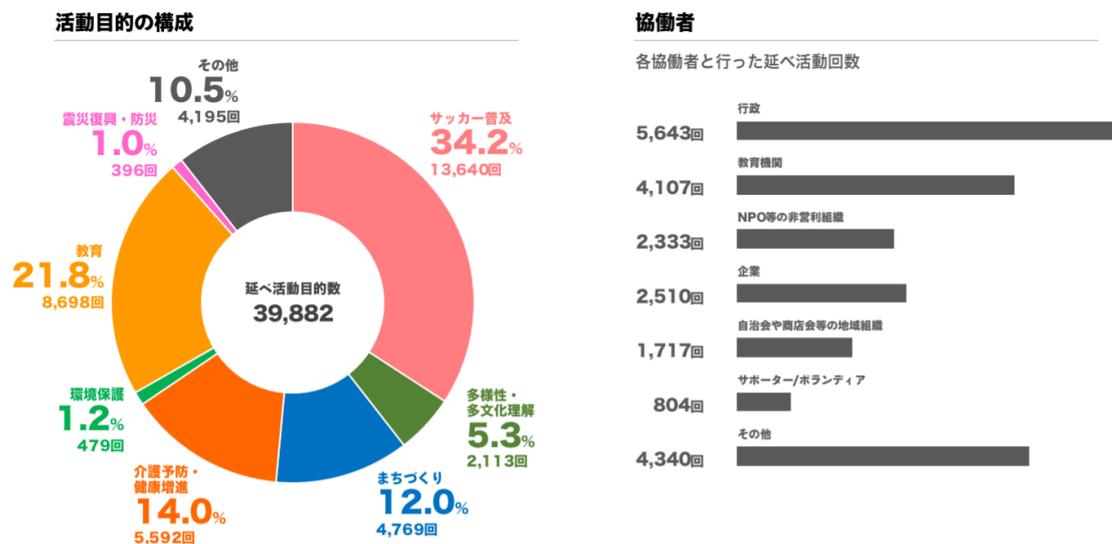


図1 Jクラブの地域貢献活動における活動目的の構成と協働者
出典) Jリーグ ホームタウン活動調査 2019年版

サッカーの普及以外にも多様な活動を行っていることがわかる。すでに述べたように、今やJクラブは全国40都道府県に存在している。割合の高い「まちづくり」、「介護予防・健康増進」や「教育」といった活動を地域の実情に合わせて実施できるのがJリーグの強みだろう。また割合としてはそこまで高くないが、「多様性・多文化理解」や「環境保護」といった全世界的に取り組まれている活動、「震災復興・防災」という自然災害の多い日本を象徴するような活動も行われている。

Jリーグが行う地域貢献活動の中で特に注目したいのが「シャレン！」である。2019年には1,382のシャレン活動が行われた。これは社会課題や共通のテーマ（教育、ダイバーシティ、まちづくり、健康、世代間交流など）に、地域の人・企業や団体（営利・非営利問わず）・自治体・学校などとJリーグ・Jクラブが連携して取り組む活動である。3者以上の協働者と共通価値を創る活動を想定しており、これらの社会貢献活動を通じて地域社会の持続可能性の確保、関係性の構築と学びの確保、それぞれのステークホルダーの価値の再発見に繋げる。またSDGsへの貢献も期待できる⁴。

⁴ シャレン！Jリーグ社会機構「シャレン！（社会連携活動）とは？」
<https://www.jleague.jp/sharen/about/>（2020年9月27日閲覧）

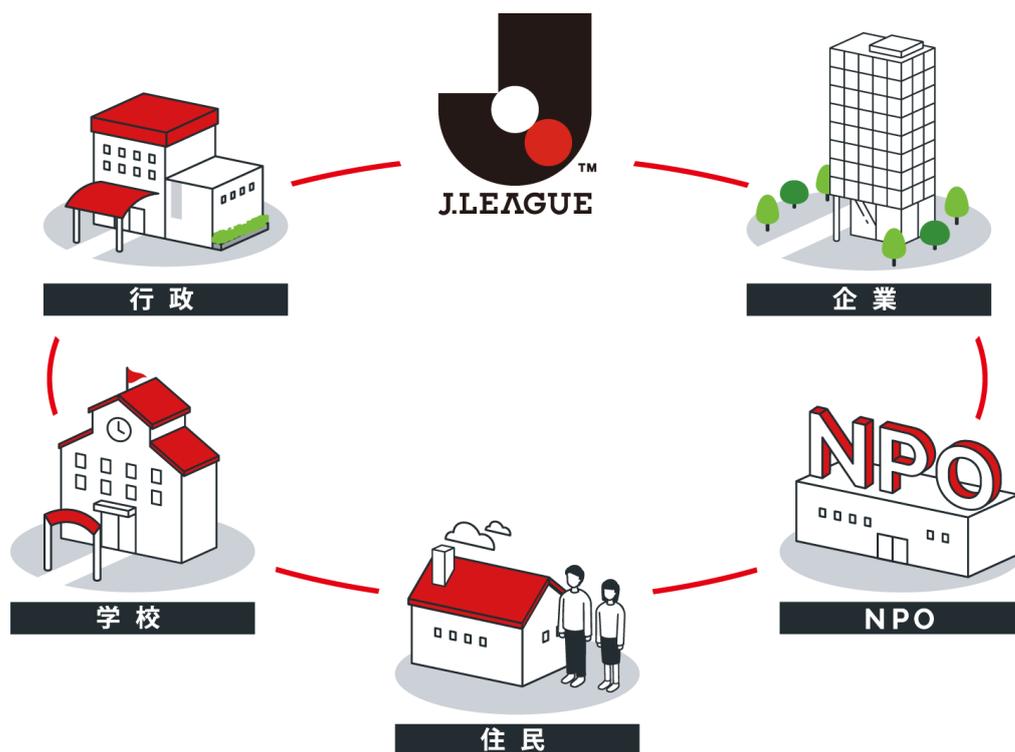


図2 シャレン！のイメージ

出典) シャレン！Jリーグ社会機構「シャレン！（社会連携活動）とは？」

2020年には「Jリーグシャレン！アウォーズ」が初めて開催され⁵、各クラブがエントリーしたシャレン！活動から各賞を決定した。「ソーシャルチャレンジャー賞」、「メディア賞」など多様な賞が用意されたが、今回は一般投票の上位2つの活動を紹介する。

(1) 手話応援デー（大宮アルディージャ）

1位に輝いたのは大宮アルディージャの「手話応援デー」である。障がいのある人もない人も一緒にクラブを手話で応援しようと2006年から実施されている。年1回、大宮アルディージャのホームゲーム開催日に行われ、当日はスタンドでの応援だけでなく啓発、手話体験、聴導犬PRのブースも設けられ、スタジアム全体で手話応援に関われる1日になる。ノーマライゼーションの普及を目的に企画され、手話応援実行委員会を中心に約80社/団体の協力を得ている。

⁵Jリーグ公式サイト「2020Jリーグシャレン！アウォーズ各賞決定のお知らせ」

2020年5月12日

<https://www.jleague.jp/sharen/news/224/>（2020年9月29日閲覧）

(2) 発達障がい児向けサッカー×ユニバーサルツーリズム（川崎フロンターレ）

2位は川崎フロンターレの「発達障がい児向けサッカー×ユニバーサルツーリズム」である。発達障がいは見た目にはわかりにくく、社会的認知度が低いことから、本人と家族が日常において周囲から色眼鏡で見られたり、しつげがなっていないと言われたりすることが多く、外出や旅行をためらうケースが多いと言われる。また発達障がい児には、特性から感覚過敏の方も多く、人混みなどが外出等における障壁になっており、スポーツ観戦も楽しむ前に諦めてしまっている子どもが多いと言われる。このような社会の偏見や誤解を払拭し、「心のバリアフリー」を進め、誰もがスポーツや旅行を安心して楽しめる社会の実現に寄与する。川崎市が主催、共催に川崎市自閉症協会、企画・運営に富士通、ANA、JTB、フロンターレやJリーグが関わっている。2019年は7月27日（土）の大分トリニータ戦にて実施された。

注目すべきは「センサリールーム」である。感覚過敏の特徴がある子どもたちとその家族が安心して過ごせる部屋で、大きな音や眩しい光、人混みが苦手な人でも落ち着いた環境でサッカー観戦を楽しめる。当日はフロンターレのホームスタジアムである等々力陸上競技場のメインスタンド一室をセンサリールームとして活用した。

このように、Jリーグクラブは積極的に地域と関わり活動している。紹介したような地域貢献活動に限らず、試合や試合前のスタジアムイベントなど、日常的に様々な場面で人と人との繋がりを作り出す。さまざまな地域課題が存在し、人間関係の希薄さが社会問題となっている現代日本において、Jリーグは大きな役割を果たせるのではないだろうか。

第2章 新型コロナウイルス禍のJリーグ

2020年初頭より流行が始まった新型コロナウイルスにより、Jリーグが大きな打撃を受けた。2月16日(日)のYBCルヴァンカップ・グループステージ第1節、2月21日(金)から2月23日(日)にかけて行われたJ1リーグ及びJ2リーグの開幕戦は予定通り開催されたが、2月26日(水)に開催が予定されていたYBCルヴァンカップ・グループステージ第2節以降全ての公式戦が延期された。

リーグ戦が再開されたのは6月末で、公式戦は4か月間行われなかった。しかし影響が及んだのは試合だけではない。4月から5月の緊急事態宣言が発令中はトレーニングを含む一切の活動を休止したクラブがほとんどで、他人との接触が制限される感染症下では、地域貢献活動さえまともに行えない状況に陥った。そのような状況下で、従来にはない新たな取り組みが見られた。

第1節 デジタルを活用した取り組み

現代はテクノロジーが加速度的な進化を遂げている。コロナ禍で他人との接触が制限される中、ウェブ会議や学校でのオンライン授業などデジタルを活用する機会が増えてきたが、それはサッカー界も例外ではない。

ここで紹介したいのは、川崎フロンターレの「オンラインフロンパーク」である。フロンターレはJリーグが実施している観戦者調査において、10年連続で地域貢献度第1位に輝くなど地域との関係を大切にするクラブで、コロナ禍でも積極的な動きを見せた。

「フロンパーク」とはフロンターレが2009年以降、ホームゲームの開催日に実施してきた場外イベントである。様々なイベントが催され、毎回大盛況となるイベントであるが、試合が延期されていた期間はもちろん実施は不可能な状況であった。

そんな中で「新時代のフロンパーク」として誕生したのが「オンラインフロンパーク」である。コロナ禍で一躍注目を浴びた、オンライン会議ツールの「Zoom」や「Remo」を活用し、選手トークショー・歓談や新オフィシャルグッズショップ、フロンターレカフェの見学会などを実施するという。5月23日にはトライアルを実施し、6月には3回開催する⁶。

各回で募集人数が決められており、Zoomでの選手トークショー参加者は100名(後援会会員限定・事前申込)、Remoでは800名(当日先着)となっている。このシステムの利点は選手とのコミュニケーションが密にとれることだろう。また「マスコットとチャットで会話」などデジタルならではのイベントもある。筆者は参加したことがなく、このシステム自

⁶ 川崎フロンターレ公式ウェブサイト「この難局を乗り越えよう『オンラインフロンパーク』計画(オフロ計画)6月分参加者募集のお知らせ」2020年6月8日
https://www.frontale.co.jp/info/2020/0608_7.html (2020年6月14日閲覧)

体開始されたばかりであるためまだその全貌は見えないが、今後のデジタル時代を考えると大きな可能性を秘めていることは間違いない。クラブの掲示板や SNS などを見る限り、参加者の満足度は高いように見受けられる。

実際、このオンラインフロンパークは現在もアウェイゲーム開催日の試合前に行われている。マスコットが代理でガラポン、クラブ OB による裏解説など、リアルとは違うコンテンツが用意され、差別化もできている。すでにホームゲーム開催日はリアルのフロンパークが復活しているが、遠方に住んでいてなかなかスタジアムに行けない人やテレビ観戦の人などを中心に需要は残り続けるのではないだろうか。

第2節 スタジアムを活用した取り組み

スタジアムはサッカークラブが有する重要な財産である。普段はファン・サポーターの熱狂で盛り上がるスタジアムも、試合がなく役目を失った。しかし感染の広がりとともに、主にヨーロッパにおいてスタジアムをコロナウイルス対策に活用する事例が見られた。本論文は主として日本の Jリーグについて述べることを目的としているが、日本より先に感染が拡大したヨーロッパの事例には参考になる部分も多い。Jリーグの前に、日本ではあまり見られなかった、スタジアムを活用したヨーロッパでの事例を2つ紹介する。

まずはドイツのボルシア・ドルトムントである。ドルトムントは4月3日、ドイツ最大の規模を誇るホームスタジアム、ジグナル・イドゥナ・パルクをコロナ対策に提供することを発表した。地元機関のヴェストファーレン・リッペ保険医協会 (KVWL) と協力してスタジアムの北スタンドを改装し、治療センターとして活用する。既存医療機関の負担軽減を目的に、感染の可能性がある人、発熱などの症状を訴える人だけを対象とし、医師によって重症度の評価や入院の判断が行われる。既存の医療機関での患者や医療スタッフとの接触を軽減し、感染の連鎖を断ち切る⁷。治療センターは北スタンド4階に置かれ、スタジアム前庭からアクセスできる。受付時間は毎日12時から16時(中央欧州標準時)まで、事前登録は不要だという⁸。

このセンターでは7週間で1000人以上の感染者が治療を受けた。ドイツで感染拡大が抑

⁷ サッカーキング「ドルトムントが新型コロナ対策支援・・・スタジアムの一部を治療センターに改装」2020年4月4日

<https://www.soccer-king.jp/news/world/ger/20200404/1053118.html>

(2020年5月15日閲覧)

⁸ Borussia Dortmund 公式ホームページ「ジグナル・イドゥナ・パルクがコロナ治療センターに」2020年4月4日

<http://www.bvb.jp/news/ジグナル・イドゥナ・パルクがコロナ治療センター/>

(2020年5月15日閲覧)

えられている現状を踏まえ、同月 20 日をもって完全に閉鎖される。20 日以降はクリニック・ドルトムントの治療センターを引き続き利用できるという。

ドイツでは5月16日に同国のプロサッカーリーグであるブンデスリーガが、世界に先駆けて再開される。3月9日以来2か月振りに開催される公式戦は、無観客試合、スタジアムに入れる最大人数の設定など徹底した感染対策での再開となる。主要リーグではコロナ拡大後初の公式戦となり、他国リーグの今後の再開に向けた試金石になるだろう。

続いてイングランドのトッテナム・ホットスパーFCである。トッテナムは3月30日、首都ロンドンにある2019年にオープンしたばかりのホームスタジアム、トッテナム・ホットスパー・スタジアムを提供することを発表した。しかし、ドルトムントとはその用途が異なる。トッテナムではスタジアムの地下駐車場が食糧保管庫として利用されている。保管庫はコロナのパンデミックを受けて新たに設立された慈善団体『ロンドン・フード・アライアンス』によって管理され、集めて余った食糧を市内の必要とする人たちに届けるための拠点として活用される⁹。

このように、海外では検査場、食糧保管庫などスタジアムを活用したコロナ対策が打ち出された。では日本のJリーグではどのような取り組みがなされたのだろうか。

4月21日、Jリーグの村井満チェアマンは理事会後にウェブ上で記者会見を行い、クラブハウスなど各クラブの施設をコロナ対策のために提供することを明らかにした。20日、当時の菅義偉官房長官と会談した際に提案し、「国や行政から要請がある場合に検討していく」と説明した¹⁰。

Jリーグの声明を受け、具体的な動きを見せたのが鹿島アントラーズである。ホームスタジアムのカシマスタジアムで5月11日から、新型コロナウイルス感染の有無を調べるPCR検査が始まった。ドライブスルー式を採用する。スタジアム内に治療センターを作ったドルトムントとは違い、スタジアムの外側にセンターを設ける¹¹。検査場を運営する鹿島医師会によると、鹿行地域は茨城県内でも医師不足が深刻だという。検査拡充のため、2月から検

⁹ サッカーキング「トッテナム、新型コロナ対策支援でスタジアム提供・・・食糧保管庫として活用」2020年3月31日

<https://www.soccer-king.jp/news/world/eng/20200331/1052058.html>

(2020年5月16日閲覧)

¹⁰ 日本経済新聞「Jリーグのクラブ施設、コロナ対策に提供へ 村井チェアマン」

2020年4月21日

https://www.nikkei.com/article/DGXLSSXK20806_R20C20A4000000/

(2020年5月16日閲覧)

¹¹ 日本経済新聞「カシマスタジアムでPCR検査 ドライブスルー式」2020年5月8日

<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO58858820Y0A500C2L60000/>

(2020年5月16日閲覧)

査場の設置を検討し始め、選定の過程でアントラーズが協力を申し出た。対象は鹿行 5 市（鹿嶋市、潮来市、神栖市、行方市、銚田市）の医療機関にて感染が疑われると判断され、潮来保健所が検査対象として選定した人のみで、1 日 20 件までの予約制となる¹²。Jリーグクラブの関連施設に検査場を設置するのは初のことであった¹³。

これに先立つ 4 月 19 日にはイングランド・プレミアリーグのブライトン・アンド・ホーヴ・アルビオン FC が、ホームスタジアムのアメックススタジアムをドライブスルー方式の検査場として使用することを発表している。1 日最大数千件の検査が行えるという¹⁴。アントラーズとブライトンの事例を一概に比較することはできないが、日本と海外の検査能力の差、考え方の違いが見て取れる。

医療体制の逼迫や院内感染を防ぐための対策は今後も不可欠である。サッカースタジアムは周辺の敷地、地下、スタンド、ピッチなど活用できるスペースは多くある。自前のスタジアムを有するクラブでは、スタジアムを活用する動きは今後も出てくるかもしれない。

¹² 鹿島アントラーズ公式ウェブサイト「カシマスタジアムでの鹿行地域 PCR 検査センター設置について」2020 年 5 月 7 日

https://www.antlers.co.jp/news/club_info/77159 (2020 年 5 月 16 日閲覧)

¹³ 東京新聞「〈コロナ緊急事態〉カシマスタジアム PCR 検査 きょう開始」
2020 年 5 月 11 日

<https://www.tokyo-np.co.jp/article/ibaraki/list/202005/CK2020051102000128.html>
(2020 年 5 月 16 日閲覧)

¹⁴ ロイター通信「サッカー＝ブライトン、本拠地スタジアムを新型コロナ検査場に」
2020 年 4 月 20 日

<https://jp.reuters.com/article/soccer-idJPKBN22200J> (2020 年 5 月 16 日閲覧)

第3章 Jリーグ再開に向けて

第1節 再開へ向けた動き

2月下旬から延期となったJリーグは当初、3月18日（土）からの再開を目指していたが感染は拡大の一途をたどり、再開時期はずるずると後ろ倒しになっていった。4月に発出された緊急事態宣言が5月末まで延長されたことで6月はおろか7月の再開も難しいと思われたが、徐々に新規感染者数が減少し始めたことで5月14日から緊急事態宣言の解除が始まり、5月25日には47都道府県全てで宣言が解除された。それを受けて29日、J1リーグは7月4日（土）、J2リーグとJ3リーグは1週間早い6月27日（土）の再開を決定した。4月に実施された各クラブ運営、強化担当によるウェブ会議では、活動再開後の準備期間を「4週間」設けることで合意していた。宣言解除が早かった地域と東京や大阪など25日まで延びた地域では練習開始のタイミングに差があった。そういった事情を考慮しての再開日の決定であると考えられる。宣言の延長が決定した5月上旬時点のシナリオからすると、最短で再開できたと言えるのではないか。

無観客での開催からスタートし、感染状況などを考慮して観客を入れての開催にシフトして行く。シーズン開幕前に決定していた対戦カードは全て組み直しとなり、当面はリーグを地域別に2つないし3つのブロックに分ける案が浮上している。長距離移動などによる感染リスクを避けるため、近隣クラブとの対戦を優先的に実施する可能性が高い。

実際、今シーズンは大会方式について大幅な変更が施された。6月5日、2020明治安田生命Jリーグの開催方式変更を決定した¹⁵。大きな変更は開催期間の延長である。当初の予定ではJ1リーグは12月5日（土）、J2リーグは11月22日（日）、J3リーグは12月13日（日）に終了する予定であったが、それぞれJ1リーグは12月19日（土）、J2リーグとJ3リーグは12月20日（日）に変更になった。J2リーグに関しては1か月程度延びることになる。翌年の1月中旬には新シーズンの練習をスタートするクラブが多く、例年よりもシーズン終了後のオフが短縮される。選手のメンタル面、コンディションへの影響が懸念される。また、再開後は過密日程になる。選手の負担軽減のため、今シーズンは選手交代枠を通常の3名から5名に拡大し、交代回数はハーフタイムを除き3回までとなる。交代枠数の変更は各チームの戦術、戦い方にも大きな影響を及ぼすことになる。

最も大きな変化を迫られるのが天皇杯である。「天皇杯 JFA 全日本サッカー選手権大会」は高校、大学から日本最高峰のJ1まで、アマチュアとプロがその垣根を超えて日本一を目

¹⁵ Jリーグ公式サイト「2020明治安田生命J1リーグ・J2リーグの再開およびJ3リーグの開幕日について」2020年5月29日

<https://www.jleague.jp/news/article/171111/>（2020年6月11日閲覧）

指す、「元日・国立競技場での決勝」で有名な大会である。記念すべき 100 回目を迎える今年の天皇杯は元来、J1、J2 そして予選を勝ち抜いた都道府県代表チームの全国 88 チームによるノックアウト方式で 5 月下旬に開幕予定だったが、リーグ戦の日程消化を最優先するため大幅な変更を強いられる。4 月 24 日の J リーグの発表によると、第 100 回に限り出場チームを絞り、9 月の開幕となった。通常、J1 と J2 のクラブは無条件参加だが、今年は 2020 明治安田生命 J1 上位 2 チームと J2 優勝チームが準決勝から参加することになる。プロチームの参加は 3 つのみという前代未聞の変更になるが、アマチュアチームにとってはチャンスでもある。例年プロチームの前に涙を吞んできたアマチュアチームも上位進出が十分に狙える。大学生チームが元日国立の舞台に立つチャンスも十分にある。第 100 回という節目を迎えると同時に、天皇杯の歴史が大きく変わる大会になるかもしれない。

6 月 15 日、12 月のシーズン終了までの全日程が発表された。J1 リーグの第 2 節・第 3 節（7 月 4 日、7 月 8 日開催）、J2 リーグの第 2 節・第 3 節（6 月 27 日、6 月 28 日、7 月 4 日、7 月 5 日開催）、そして J3 リーグの第 1 節・第 2 節（J2 リーグと同日開催）がリモートマッチで開催されることが決まった。各クラブ、リモートマッチが 2 試合に抑えられれば影響は最小限に留められるが、今後の感染状況によっては長引く可能性もある。

感染予防の観点から、試合日程は大幅に変更された。リモートマッチで開催される J1 リーグの 2 試合を参考にその変化を見てみたい。括弧内のクラブは今年 1 月に決まった、当初予定の対戦相手である。

表 1 J1 リーグ・リモートマッチ開催分の対戦予定と当初予定との比較（チーム名の前の H はホームゲーム、A はアウェイゲーム）

クラブ名	第 2 節（当初予定）	第 3 節（当初予定）
北海道コンサドーレ札幌	A・横浜 FC（川崎）	A・鹿島（G 大阪）
ベガルタ仙台	A・湘南（G 大阪）	H・浦和（神戸）
鹿島アントラーズ	A・川崎（神戸）	H・FC 東京（清水）
浦和レッズ	H・横浜 FM（広島）	A・仙台（FC 東京）
FC 東京	A・柏（横浜 FM）	H・川崎（浦和）
柏レイソル	H・FC 東京（横浜 FC）	H・横浜 FC（川崎）
川崎フロンターレ	H・鹿島（札幌）	A・FC 東京（柏）
横浜 F・マリノス	A・浦和（FC 東京）	H・湘南（湘南）
横浜 FC	H・札幌（柏）	A・柏（鳥栖）
湘南ベルマーレ	H・仙台（名古屋）	A・横浜 FM（横浜 FM）
清水エスパルス	H・名古屋（大分）	A・G 大阪（鹿島）
名古屋グランパス	A・清水（湘南）	H・C 大阪（大分）
ガンバ大阪	H・C 大阪（仙台）	A・名古屋（札幌）
セレッソ大阪	A・G 大阪（鳥栖）	H・清水（広島）

ヴィッセル神戸	H・広島（鹿島）	A・鳥栖（仙台）
サンフレッチェ広島	A・神戸（浦和）	H・大分（C大阪）
サガン鳥栖	A・大分（C大阪）	H・神戸（横浜FC）
大分トリニータ	H・鳥栖（清水）	A・広島（名古屋）

Jリーグ公式サイト（https://www.jleague.jp/img/pdf/20200615_j1.pdf）及び「エルゴラッソ Jリーグ選手名鑑 2020」より筆者作成

アウェイゲームへの移動には大きく飛行機、新幹線、バスの3つの交通手段がある。発表された日程を見ると、大多数のクラブはバス移動可能な距離の近隣クラブとの対戦を意識して日程が組まれたことが分かる。札幌は最も近隣のクラブが仙台であり、長距離移動が免れないが、川崎→大阪が横浜→鹿島と変更され、試合間の移動は当初予定より短距離になっている。仙台、清水、神戸はそれぞれ湘南、大阪、鳥栖への移動とやや距離が気になるが、全体的に最大限の配慮がなされた結果であることは間違いないだろう。

日程表を見ると、J1リーグの場合、7月から10月は毎月6試合、11月は5試合、12月は4試合が予定されている。J1は再開初戦となる7月4日から26日までの22日間で6試合、3～4日で1試合をこなすこととなる。J2に関しては再開初戦から8月末までの2か月で14試合、週2試合ペースとあまりにも過酷なスケジュールが待っている。たださえ気温が高い夏は選手にとって厳しい季節である。例年も週に2試合行われることがあるが、今年ほどの過密日程は過去に見たことがない。そして過密日程は選手だけでなくクラブスタッフも同様である。筆者は大学3年次の夏、地元クラブである栃木SCのインターンシップに参加し、8月中旬のホームゲームの準備に参加した。1日がかりの炎天下での作業は大変であったが、クラブスタッフは深夜2時頃に帰宅ということが珍しくないという。ホームゲームの開催前には前日準備もある。それが週2回となると、果たして休む時間があるのだろうか。選手や監督はもちろん、クラブスタッフの健康と安全を祈るばかりである。

第2節 「無観客試合」を「リモートマッチ」へ

J1リーグは7月4日（土）、J2リーグとJ3リーグは6月27日（土）の再開（J3リーグは開幕）が正式決定した。政府の「基本的対処方針」では無観客で始めるプロスポーツの試合について、7月10日以降、条件付きで観客を入れての開催を容認している。これを受けJリーグでは政府方針に従い、7月10日以降、感染対策をとりながら観客を入れることを各クラブと申し合わせた¹⁶。無観客試合からのスタートとなるが、最短で観客収容が可能な

¹⁶ NHK NEWS WEB 「Jリーグ 来月10日以降 観戦対策し観客入れて試合」
2020年6月9日

<https://wmr.tokyo/football/?p=360521>（2020年6月11日閲覧）

ら無観客試合の開催は片手で数えられる程度の数に収まりそうである。

6月15日、Jリーグは再開後の日程を発表した。この発表より、「無観客試合」を「リモートマッチ」と呼称するようになった。「リモートマッチ」への名称変更の経緯については同日、一般社団法人日本トップリーグ機構が説明している¹⁷。なお、日本トップリーグ機構はボールゲーム9競技の日本最高峰12リーグの競技力の向上と運営の活性化を目指した活動を行っている。

名称変更の際して、「#無観客試合を変えよう」というハッシュタグを用意し、6月3日から6月9日までの1週間、ツイッター上で幅広く募集した。合計で9156案の応募があり、加盟する全てのリーグと候補を選定した上で最終決定された。競技によって試合の呼び方が異なるため、「リモートゲーム」と呼ぶ場合もある。リモートマッチの略称は「リモマ」であり、リモートで応援するファンを「リモーター」と呼ぶ。

同機構のホームページによると、「リモートマッチ」の選定理由として、①選手とファンがつながっている意味を込めたい、リモートは物理的には離れていても選手とファンの繋がりを示すことが出来る②リモーターと合わせて使用することで、選手とファンの新しい関係性が生まれる可能性を感じる③略称のリモマ、各リーグの頭にリモートをつけ応用できる（例：「リモートJリーグ」→「リモJ」）④試合配信の有無に関わらず、またお客さんが入れるようになった場合でも汎用的に使用可能⑤リモートは昨今社会にしている言葉で説明が少なくても理解できる、が挙げられている。

また、他に最終候補として検討した案として「Stay Home Game」や「リモートステージ」などがあるが、筆者が気になったのは「Social Distance Games (SDGs)」という案である。ソーシャルディスタンスという流行語を取り入れつつ、昨今の世界全体の目標となっている「持続可能な開発目標 (SDGs)」と同じ略称になるというおまけつきで、名称変更と同時にSDGsの普及も狙える。しかし、サッカーにおいては試合のことを「ゲーム」より「マッチ」と呼ぶ機会が多く、JリーグにおいてはSDGsではなくSDMsになるため、この恩恵は受けられなかった可能性が高く、やはりリモートマッチが最適解だったと言えるだろう。

¹⁷ 一般社団法人日本トップリーグ機構「無観客試合に代わる名称を決定いたしました」

2020年6月15日

japantopleague.jp/archives/7575 (2020年7月11日閲覧)

第4章 新しい観戦様式

第1節 デジタル応援システム

一般的に、無観客試合においてはサポーターの声援がなく、選手・監督の声、ボールを蹴る音だけが響き、淡々と試合が進んでゆく印象がある。Jリーグの歴史上、唯一無観客で開催された2014年の浦和レッズと清水エスパルスの試合のように「処分」の意味合いで実施する場合は良いが、今回のような状況では少し寂しい。

サポーターの応援がないと言う状況は、無観客での試合に限らず、観客が入ったあとも当分続くと考えられる。「Jリーグ 新型コロナウイルス感染症対応ガイドライン」では、サポーターの「新しい応援スタイル」も提案している。そこでは「声を出しての応援」、「ハイタッチ、肩組み」などはもちろん、「手拍子」や「タオルマフラーを振る、回す」といったことも禁止される。これまでの応援スタイルは当分制限されることになる。そのような状況下で、新たなデジタル応援システムが誕生した。ここではともに静岡県に本拠地を置く2クラブによる事例を紹介したい。

(1) ジュビロ磐田（ヤマハ株式会社）の「リモート応援システム」

ジュビロ磐田のスポンサーであるヤマハ株式会社はリモート応援システム『Remote Cheerer powered by SoundUD (リモートチアラー パワード バイ サウンドユードイヤー)』を開発し、6月13日（土）に開催されたアスルクラロ沼津との練習試合において実証実験が行われた¹⁸。その後、ジュビロのみならず多数のクラブが利用し、シーズンが進むにつれ新たなサッカー観戦のお供として定着してきた印象がある。

このリモート応援への参加には3つのステップがある。実証実験の対象となった磐田と沼津を例として紹介する。まずアクセスであるが、これには①Jリーグ公式アプリ「Club J.LEAGUE」から②ジュビロ磐田公式アプリから③アスルクラロ沼津公式LINEアカウントから送られるURLからの3つの方法がある。磐田のサポーターは②、沼津のサポーターは③、どちらのサポーターでもないが応援に参加したい人は①といったように棲み分けがなされれば、サーバーの負荷軽減にも繋がり、急にアプリが落ちるといったことも防げそうである。

次に応援するチームを選択する。磐田のサポーターだけでなく、アウェイチームである沼

¹⁸ ジュビロ磐田公式サイト「6/13（土）練習試合 vs 沼津 リモート応援システムのご参加方法について」2020年6月11日

https://www.jubilo-iwata.co.jp/newslist/detail/?nw_seq=7281（2020年6月14日閲覧）

津のサポーターも参加できる点が興味深い。

最後に参加するモードを選ぶ。このリモート応援では2つのモードがある。以下がアプリ画面である。



図3 ヤマハの「リモート応援システム」の画面（左がリアルタイムモード、右が放送連動モード）

出典) ジュビロ磐田公式サイト「6/13 (土) 練習試合 vs 沼津 リモート応援システムのご参加方法について」

(https://www.jubilo-iwata.co.jp/newslist/detail/?nw_seq=7281&year=2020&month=06)

両モードとも「応援ボタン」を押したタイミングでスタジアムに声援が流れる点は共通するが、一部機能に違いがある。

「リアルタイムモード」では、スタジアムで今まさに繰り広げられているプレーに応じて、現地から参加者に合図を送ることで、連動した特定の「シーンボタン」が点滅する。そのボタンを押すことで、リアルタイムの試合展開に合わせたタイムリーな声援を送ることが出来る。より一体感を楽しめるモードになっていると言えるが、遅延なしで特定のシーンボタンが点滅するため、視聴している映像よりも早く試合展開を把握することになる、という大

きな欠点がある。

一方の「放送連動モード」はその欠点を補うモードである。「シーンボタン」は使用できないが、映像より先に試合展開を知る恐れがなく、自分の好きなタイミングで声援を送ることができる。スタジアムでゴールなどの特定のシーンが発生した場合に「応援ボタン」を押すと自動的に、そのシーンに合わせて会場で発生している声援を増幅する。スタジアムではそのシーンに合わせた声援が強調され、声援が被らないようにする工夫もされている。先に試合展開を知りたくないというサポーターにも配慮する工夫が素晴らしい。

この実証実験にリアルタイムで参加することはできなかったが、後に試合の録画を見てみると、いつもの選手紹介がなされ、定番の磐田の応援歌が耳に入ってきた。無観客試合という事実を忘れてしまうほどであった。

リーグ再開後、多くの試合でこのリモート応援システムが利用され、筆者もリモート応援を体験した。通常の試合と同じように、常にチームのチャント（応援歌）が聞こえてきた。これはリモート応援参加者がそれだけ多く、注目を集めたことの証拠であろう。逆に、ひっきりなしにチャントが流れているため、自分がボタンを押したことによる効果、影響のようなものはあまり感じられなかった。リアルタイムで試合に参加している感覚は得られるが、後述する栃木 SC のように、スタジアムで一方的に音源を流す場合とあまり変わらないとも感じた。

それでもサポーターや選手からの評価は上々のようだ。サポーター歴 27 年、清水エスパルスの古参サポーターは「片手ひとつで、ちょっとでも声援が送れたり、自分の気持ちを表すことができ、スタジアムで応援している気分になれるので楽しい」と話す¹⁹。自分の鼻先にしているチームの試合では、このシステムの良さが良く分かるのかもしれない。

(2) 清水エスパルス「S-PULSE STADIUM」

清水エスパルスは「エスパルス #新たな観戦スタイル プロジェクト」の一環として、試合当日に利用できる観戦サポータリングアプリ「S-PULSE STADIUM」を導入した。これは「スタジアム観戦、リモート観戦問わず、ファン・サポーターのクラブ・選手への応援をチームに届ける」ところまではヤマハのリモート応援システムと同じだが、「スタジアムとサポーターの熱狂を可視化する」ところに特徴がある。自分が送った声援が、目に見える形になって表れるのである。

このサービスでは、サービス内通貨である「サポート」を購入し、選手やプレーの一つ一

¹⁹ FNN プライムオンライン「J1 リーグ再開 自宅でリモート応援『スタジアムでの気分になれる』 静岡」2020 年 7 月 6 日

<https://www.fnn.jp/articles/-/59958> (2020 年 7 月 9 日閲覧)

つに対して、デジタルグッズを介した応援を届ける「サポーティング」ができる²⁰。



図4 清水エスパルス「S-PULSE STADIUM」利用中の画面

いずれも筆者が利用時の画面スクリーンショット

試合中、良いプレーがあった選手のアイコンをアップすると、選択中の（右下に表示されている）アイテムが選手の元へ飛んで行く（図左）、このアイテムは画面右下の切り替えボタンを押して変更することが可能で、実に多彩なアイテムが揃っている（図右）。課金することでより多くの声援を送れるが、新規登録時に 500 サポートを受け取れるため、それでも十分楽しめる。最高峰のプレーには「日本最高峰・富士山」のアイテム、疲れが見える選手には「うな重」のアイテムでスタミナ回復、交代選手には「お茶」のアイテムでほっと一息、など静岡の名物も豊富に取り入れつつ、それぞれに様々な思いが込められている。

このアイテムの豊富さもさることながら、筆者が気に入ったのはアイテムが実際に選手の元に飛んで行くことで、自分の応援が目に見える点である。ヤマハのリモート応援システムのようにスタジアムの音量などに影響を与えるわけではなく、あくまでアプリ内で完結するシステムであるが、応援が可視化されるのは楽しいものである。より多くのクラブに広がってほしいサービスである。

²⁰ 清水エスパルス公式 WEB サイト「S-PULSE STADIUM（スタジアムアプリ）」
<https://www.s-pulse.co.jp/fan/app/stadiumapp>（2020年12月10日閲覧）

第2節 リモートマッチにおける応援スタイル

予定通り、6月27日（土）にJ2リーグとJ3リーグ、7月4日（日）にJ1リーグが再開した。筆者はいくつかの試合を視聴し、各クラブにおけるリモートマッチのスタイルの違いを調べてみた。

6月27日に行われたジェフユナイテッド千葉と大宮アルディージャ、翌28日に行われたFC琉球とアビスパ福岡の試合では、前述したヤマハ株式会社開発のリモート応援システムが採用されていた。ヤマハは各クラブと連携し、リモートマッチ時代の新しい観戦スタイルを検証するためJ1の5クラブ、J2の12クラブ、J3の9クラブ、合計26クラブにリモート応援システムを提供するプロジェクトを行っている²¹。この2試合のホームクラブである千葉と琉球は、いずれもこのプロジェクトに参加している。

こちら6月27日に行われたモンテディオ山形と栃木SCの試合は様相が異なっていた。山形もヤマハのプロジェクトに参加しているが、この試合ではリモート応援は実施されず、チャントなしで手拍子の音源を流すスタイルであった。この手拍子のリズムが単調で少し退屈な印象であった。SNSや掲示板を見る限り各クラブのサポーターの反応もいまいちで、むしろ「選手、監督の声が聞きたかった」と無観客ならではの楽しみ方を求める声もあった。

7月4日の川崎フロンターレと鹿島アントラーズの試合では、基本は無音、得点などのアクションがあった場合にはチャント音源を流すといういわば「平時と無観客のハイブリッド」のようなスタイルになっていた。無観客ならではの楽しみができる一方、選手・監督の声が響く試合はどこか寂しい印象もあった。ここは人によって評価が分かれるだろう。

7月5日は栃木SCと東京ヴェルディの試合。栃木は6月上旬、無観客試合で試合中に流すチャント音源を募集しており、その音源が試合の展開に合わせて放送されていた。こちらはリモート応援を実施した試合と似ており、平時のように90分間チャントが流れており無観客であることを感じさせなかった。しかし音量の影響だろうか、普段のサポーターの音量より大きく聞こえたのは少し皮肉でもあった。

サポーターとしては「平時と同じようにチャントを流してほしい」、「リモート応援で試合に参加している感覚を味わいたい」という意見がある一方、「無観客だからこそ、選手や監督の声が聞きたい」という異なる意見があると思う。一方、選手としてはチャントがあった方が良いと言う声がほとんどだろう。観客が入っても、生の声がない状況は現在も続いている。今後、また新しい動きが出てくるだろうか。

²¹ DIGITAL SHIFT TIMES 「ヤマハ、リモート応援システムをJリーグのリモートマッチに提供」2020年7月3日

https://digital-shift.jp/flash_news/FN200705_2 (2020年7月8日閲覧)

第3節 リモートマッチにおけるスタンド

応援の次に気になるのが観客のいないスタンドである。応援や拍手が聞こえても、誰もいないスタンドが目に入れば選手としても寂しいだろう。殺風景なスタンドにしないため、各クラブは趣向を凝らしている。

まずはサポーターを模した段ボールをスタンドに設置し、あたかもサポーターがいるかのような状況を目指す「段ボールサポーター」である。段ボールだけでなく発泡パネルなど使用する素材に差はあるが、意図は同じである。この取り組みは、実はコロナ禍で初めて登場したものではない。その先駆けとなったのが大宮アルディージャである。2014年5月28日に徳島県の鳴門大塚スポーツパークポカリスエットスタジアムで行われた徳島ヴォルティスとの試合で、アウェーの地に遠征するサポーターの数を「増やす」ために実施した²²。平日の午後7時キックオフとあって、大宮から遠征できるサポーターの数は限られている。そのような状況での「作戦」は現地の徳島を始め、アメリカのFOXスポーツ・サッカー情報サイトにも取り上げられるなど世界でも話題になった。

コロナ禍のJリーグでいち早く動いたのはアルビレックス新潟であり、6月5日より段ボールサポーター「アルボールくん」の販売を開始した²³。価格は1体1,500円で、初回販売はバックスタンド1層目の座席とほぼ同数の4,000体に決定した。アルボールくんをそのままスタジアムに設置することもできるが、カスタマイズも可能である。

大分トリニータは「トリボード」と題して段ボールサポーター企画を行う。トリニータはクラウドファンディング形式で4種類展開する。5,000円、7,500円のコースにはトリボードに加え選手とのツーショット写真などの特典もある。目標金額は1,000万円で、資金はトリボード製作費及び設置費のほか、無観客試合等に伴う減収補填、コロナ対策の寄付金として大分県に寄附するという²⁴。

その他にはサガン鳥栖が「砂段ティーノ（サポーターの愛称であるサガンティーノにかけ

²² NAVERまとめ「大宮サポーターの『偽兵の計』が日本を飛び出し海外へ!!」

2016年12月14日更新

<https://matome.naver.jp/odai/2140187386948756601> (2020年6月16日閲覧)

²³ アルビレックス新潟公式サイト「Jリーグ初! 段ボールサポーター『アルボールくん』価格は驚きの1,500円、初回制作数4,000体で本日6月5日(金)18:00販売開始!」

2020年6月5日

<https://www.albirex.co.jp/news/59151/> (2020年6月17日閲覧)

²⁴ 大分トリニータ公式ウェブサイト「『本当に無観客!? 段ボールサポーター(愛称:トリボード)でゴール裏を埋めよう!』大作戦を6月24日(水)まで開催!~みんなの力を合わせて選手を後押ししサッカーの日常を取り戻そう~」2020年6月16日

<https://www.oita-trinita.co.jp/news/20200658084/> (2020年6月17日閲覧)

て)」として販売、そして段ボールサポーターの嚙矢である大宮アルディージャも実施を決めた。



図5 アルビレックス新潟の「アルボールくん」

出典) アルビレックス新潟公式サイト「Jリーグ初！段ボールサポーター『アルボールくん』」 (<https://www.albirex.co.jp/news/59151/>)

6年前の大宮サポーターが嚙矢となった段ボールサポーターが、コロナ禍で再び脚光を浴びた。この取り組みは今後も継続されるかもしれない。普段でも平日の試合や荒天の試合では、閑古鳥が鳴くような状況のスタジアムが珍しくない。

トリニータのみ言及がなかったが、他3クラブはひとまず再開直後のリモートマッチのみでの掲出になるようだ。新潟と大分に関してはすでに紹介した通りであるが、鳥栖は3,500円、大宮は4,000円とそれなりの価格になっている。もちろん、サポーターとしては損得勘定で購入するものではないかもしれないが、サポーターの入りが良い試合などで今後も活用してほしいものである。

その他、座席にクラブならではのものを設置し、スタンドに彩りを加えているケースがあった。

ベガルタ仙台は「#ぬいぐるみ大作戦」として、クラブマスコットであるベガっ太とルターナにメッセージボードを持たせ座席に設置した²⁵。座席にマスコットのぬいぐるみが着席している光景に癒されたので、筆者としては好きな取り組みであったが、仙台サポーターの間では賛否両論あったようだ。

ぬいぐるみはサポーターが購入するが、大きいものだと12,000円となかなか高額である。試合後は購入したサポーターへの受け渡しを検討したが困難と判断し、幼稚園や福祉施設への寄付など地域連携活動に使用するとしている。段ボールサポーターのように自分の写

²⁵ ベガルタ仙台公式ウェブサイト「#ぬいぐるみ大作戦 販売開始のお知らせ」

2020年6月16日

<https://www.vegalta.co.jp/news-goods/2020/06/post-235.html> (2020年7月10日閲覧)

真が掲示されるわけでもなく、購入したぬいぐるみがもらえるわけでもないため、サポーターとしてはあまり魅力を感じられなかったのかもしれない。また、販売数量が合計 300 個と小規模でぬいぐるみは BIG サイズでも高さ 50cm 程度。収容人数 2 万人のスタジアムではインパクトに欠ける。ただ、筆者としては好きな企画なので、費用的に難しいと思うが、座席全体をマスコットで埋めたスタジアムを見てみたくなった。



図6 ソーシャルディスタンスを保ち応援するベガルタ仙台のマスコット

出典) サッカーダイジェストウェブ「コレオ、マスコット、桶!? リモートマッチを彩ったサポーター席を特集!」 (https://www.soccerdigestweb.com/topics_detail9/id=76082)

第5章 規制と緩和の変遷

第1節 応援規制とその緩和

7月10日金曜日のファジアーノ岡山 vs ギラヴァンツ北九州の試合から予定通り、5,000人を上限として観客を入れることが可能になった。しかし、観客が入れるようになったとはいえ、当然全てが元通りというわけではなく、感染防止の観点から制約される行動が多い。川崎フロンターレの公式ウェブサイト을参考し、現状の試合運営について記載する。

まず来場に当たっての注意として「体調不良がある場合」や「同居家族や身近な知人に感染が疑われる方がいる場合」、「過去14日以内に政府から入国制限、入国後の観察期間を必要とされている国、地域等への渡航又は当該在住者との濃厚接触がある場合」は来場を控えるよう通達されている。最もこれは日常生活の中でも注意すべきポイントで、サッカー観戦よりもまず外出を控えなければならない。

次に観戦上のルールについてである。コロナ禍では応援スタイルが一変する。禁止される行為として以下のようなものが挙げられている。



図7 新しい応援スタイルで禁止される行為

出典) 川崎フットボールアディクト「新しい応援スタイルへの移行のお願い」
(<https://www.targma.jp/kawasaki/2020/07/09/post22100/>)

これらは普段、当たり前のように享受してきた応援スタイルである。特に難しいのは「声を出しての応援、「手拍子」の禁止だろう。何度もスタジアムで観戦した経験があるのでよくわかるが、ゴールが決まる、良い守備をする、良いパスが通るなど、ポジティブなプレーがあったときには自然と声が出てしまう。わざと声を出すのは言語道断だが、無意識的なところもあるので完全に規制するのは難しい。1人1人が自制心を持って観戦することが望まれる。

入場者数制限の緩和と歩調を合わせるように、応援の規制も徐々に緩和されてきた。再開から2か月が経過した8月26日、Jリーグは応援スタイルの変更を発表し「横断幕掲出」、「タオルマフラー・ゲートフラッグを掲げる」、「拍手・手拍子」（手拍子は9月7日の試合から）の容認を発表²⁶した。手拍子解禁の理由として「観客席から感染拡大となる事象が起きていないこと、および直接的な感染要因となるリスクが低いこと」が挙げられているが、当初から手拍子による感染リスクを疑問視する声は多かった。また、この時点まで、「お客様の応援行動は『自然発生的な声や拍手』を除き一律で控えていただいております」としているが、この曖昧な文言の影響で、観客が拍手をしている映像などが流れると、「〇〇（クラブ名）のサポーターが拍手してるけど良いのか」などと苦言が呈せられていた。声や拍手が自然発生的なものかどうかの判断は難しく（というより不可能に近い）、声はまだしも手拍子の感染リスクが高いとはあまり考えられない。早期に「拍手・手拍子」の容認を打ち出したのは好判断であったと言えるだろう。

10月に入ってJリーグは、太鼓やクラップバナー等、自席で叩ける鳴り物に関してはホームクラブの判断で、10月17日以降の使用を可能とした²⁷。アウェー席も同条件となる。この緩和により横断幕掲出、拍手・手拍子、タオルマフラーやゲートフラッグを掲げる行為、太鼓や応援ハリセンの使用などが認められることになり、再開当初と比べるとスタジアムに熱気が戻ってきた。しかし、未だ「声」というスタジアムの象徴は戻っていない。ウイルスの収束が見えない現状では声の緩和は見通せず、コロナ前は日常であった「応援の声のあるスタジアム」は、もはや非現実的なものになってしまった思いさえある。しかし、未だ無観客での開催が続いているスペインなど海外の現状を見れば、有観客での開催のみならず応援規制の緩和も進んでいるJリーグは順調な歩みを見せており、声を出せない不自由さがあるとはいえ、Jリーグのサポーターは十分に恵まれていると言える。規制が続くものを嘆

²⁶ Jリーグ公式サイト「『Jリーグ新型コロナウイルス感染症対応ガイドライン』スタジアムにおける応援行為に関する見直し」2020年8月26日

<https://www.jleague.jp/news/article/17737>（2020年12月1日閲覧）

²⁷ football-zone WEB「Jリーグ、10月17日以降に太鼓やハリセン等自席での”鳴り物”解禁へ ホームが使用可否を判断」2020年10月6日

<https://www.football-zone.net/archives/286674>（2020年12月2日閲覧）

くのではなく、享受できる応援スタイルを十分に活かし、観戦を楽しむべきだろう。

第2節 入場規制とその緩和

実際にはリモートマッチとして観客を入れずに行われた試合はJ1で2試合、J2とJ3は3試合で済み、7月中旬から観客を入れての開催が可能になった。イベント開催制限の緩和については以下の表に詳しい。

<基本的な考え方>

時期		収容率	人数上限
【移行期間】 ステップ① 5月25日～	屋内	50%以内	100人
	屋外	十分な間隔 ※できれば2m	200人
ステップ② 6月19日～ ※ステップ①から約3週間後	屋内	50%以内	1000人
	屋外	十分な間隔 ※できれば2m	1000人
ステップ③ 7月10日～ ※ステップ②から約3週間後	屋内	50%以内	5000人
	屋外	十分な間隔 ※できれば2m	5000人
【移行期間後】 感染状況を見つつ、 8月1日を目途 ※ステップ③から約3週間後	屋内	50%以内	上限なし
	屋外	十分な間隔 ※できれば2m	上限なし

(注) 収容率と人数上限でどちらか小さい方を限度（両方の条件を満たす必要）。

- ・ 上の表で屋外イベントは「十分な間隔。※できれば2m」とある
- ・ なお各ステップの日付は「目安」で感染状況の変化等に応じて、変更されうる

図8 イベント開催制限の段階的緩和の目安（その1）

出典) Jリーグ 新型コロナウイルス感染症対応ガイドライン

(https://www.jleague.jp/img/pdf/2020_0627_17276.pdf)

＜具体的な当てはめ＞

時期	コンサート等	展示会等	プロスポーツ等 (観客席限定)	お祭り・野外フェス等	
				全国的・広域的	地域の行事
【移行期間】 ステップ① 5月25日～	○ 【100人又は50%】 (屋外200人) *密閉空間で大声を発するもの、人との間隔を十分確保できないものは慎重な対応、官公庁にも注意	○ 【100人又は50%】 *入場制限等により、人との間隔を十分確保できないものは慎重な対応	×		△ 【100人又は50%】 (屋外200人) *特定の地域からの集まりを見込み、人数を管理できるものは可
ステップ② 6月19日～ *ステップ①からの約3週間後	○ 【1000人又は50%】 *密閉空間で大声を発するもの、人との間隔を十分確保できないものは慎重な対応、官公庁にも注意	○ 【1000人又は50%】 *入場制限等により、人との間隔を十分確保できないものは慎重な対応	○ 【無観客】(ネット中継等) *無観客でも感染対策徹底、主催者による試合中・前後における選手・観客等の行動管理	×	
ステップ③ 7月10日～ *ステップ②からの約3週間後	○ 【5000人又は50%】 *密閉空間で大声を発するもの等は、適切なガイドラインによる対応 *GoToキャンペーンによる支援(7月下旬～)	○ 【5000人又は50%】 *入場制限等により、人との間隔を十分確保できないものは慎重な対応 *GoToキャンペーンによる支援(7月下旬～)	○ 【5000人又は50%】 *感染対策徹底、主催者による試合中・前後における選手・観客等の行動管理 *GoToキャンペーンによる支援(7月下旬～)		○ *特定の地域からの集まりを見込み、人数を管理できるものは可
【移行期間後】 感染状況を見つ、 8月1日 を *ステップ③からの約3週間後	○ 【50%】 *密閉空間で大声を発するもの等は、適切なガイドラインによる対応 *GoToキャンペーンによる支援	○ 【50%】 *入場制限等により、人との間隔を十分確保できないものは慎重な対応 *GoToキャンペーンによる支援	○ 【50%】 *感染対策徹底、主催者による試合中・前後における選手・観客等の行動管理 *GoToキャンペーンによる支援	△ 【十分な間隔】 (目安は2m) *感染状況を踏まえて、判断。	

(注)どちらか小さい方を限度。他の場合も同様。

- ・ Jリーグではステップ③を「間隔 1m 確保のうえ 5,000 人以下」、移行期間後を 50%とする

図9 イベント開催制限の段階的緩和の目安(その2)

出典) Jリーグ 新型コロナウイルス感染症対応ガイドライン
(https://www.jleague.jp/img/pdf/2020_0627_17276.pdf)

「基本的対処方針」では7月10日以降、入場者の上限を5000人、または収容人数半分の程度以内のいずれか少ない方にまで拡大させるとしている。水戸ホーリーホックの「ケーズデンキスタジアム水戸」は10,152人、FC琉球の「タピック県総ひやごんスタジアム」は10,189人と際どい数字ではあるが、J1リーグとJ2リーグは全クラブのホームスタジアムが収容人数1万人を超えているため前者の条件が適用され、全クラブ5,000人が収容上限になりそうである。J3リーグではヴァンラーレ八戸、いわてグルージャ盛岡を始めリーグの半数程度のクラブのホームスタジアムが収容人数1万人以下で、約5,000人から6,000人のクラブが多い。こういったクラブは後者の条件が適用され、5,000人以下の観客動員となる。

この条件の下では平時の観客動員数により、各クラブへの影響には大きな差が出るのが予想される。特にJ1リーグは観客動員の差が大きい。2019年度の年平均入場者数が最も少なかった湘南ベルマーレ(12,848人)²⁸では5,000人制限でも半数程度の減少に留まる

²⁸ これ以降、各クラブの2019年度平均観客数はJ.LEAGUE Data Site「通算データ」年度別入場者数推移(<https://data.j-league.or.jp/SFTD12/>)を参照

が、最も多かった浦和レッズ（34,184人）では平時の7分の1程度の動員となる。平時との差が大きいほど、チケットの売り上げ収入は減少する。昨年度の平均観客数が浦和とともに3万人を超えたFC東京、同2万人後半であった横浜F・マリノス、名古屋グランパス、ガンバ大阪などは大きな影響を受けるだろう。

J2では14,497人を記録したアルビレックス新潟の他に1万人超えのクラブはない。栃木SC、東京ヴェルディ、ツエーゲン金沢、レノファ山口、徳島ヴォルティスの5チームは5千人台、FC町田ゼルビア、FC琉球の2クラブは4千人台、愛媛FCは3千人台となっている。J3に関してはロアッソ熊本の5,533人が最高（6,049人だったギラヴァンツ北九州はJ2に昇格）で、リーグの半数のチームが1千人台である。平時の平均観客数が5,000人未満また5,000人付近のクラブは良くも悪くも、様々な面で有利かもしれない。平時の観客動員が多いクラブは今回の制限により、チケット収入の落ち込みが激しく、また選手のモチベーションにも少なからず影響を与える。平時の観客動員が多いクラブはしばらく、難しい時期が続くだろう。

当初7月いっぱい措置とされていた5000人上限案は結局、9月下旬まで続けられた。この緩和については9月11日に大きな動きがあった。この日政府より発表されたイベント開催における入場者数制限の段階的緩和の方針に基づき、入場者数の制限の緩和が決定され、9月19日（土）の試合以降順次適用される。8月からの運用が予定されていた「上限を入場可能数の50%」案が、約2か月遅れで実施されることになる。しかし一斉に緩和するのではなく、入場可能数が17,000人以上のスタジアムは30%を目途とし、段階的な緩和に努めるとされている。これは良い判断だと思う。50%制限とはいえ、入場可能数約7万人の日産スタジアムでは3万5千人、同約6万人の埼玉スタジアム2002では3万人が入場できることになる。新規感染が減少傾向でも、3万人もの人が一堂に会するのはさすがに時期尚早である。特に大規模なスタジアム、例として4万人以上収容のスタジアムなどは東京都、神奈川県、大阪府、愛知県など感染者数も多い大都市に立地している（新潟県にも1つある）。大規模なスタジアムでは30%制限でも2万人近くが入場可能なケースもある。筆者が懸念するのはスタジアムの中ではなく外である。クラブも感染対策には万全を期しているため、スタジアム内は一定程度、感染のリスクが抑えられているだろう。経験上、最も怖いのは試合後の混雑である。地方に多く見られる、自家用車での来場者が多いスタジアムはそのリスクは軽減される。しかし、そのようなアクセスの良くないスタジアムでは最寄り駅からシャトルバスを運行しているケースが多いため、バス内の感染対策は必須である。

問題は、最寄り駅の日と鼻の先にあるようなスタジアムである。筆者が訪れたことのあるスタジアムで言えば、埼玉スタジアム2002と東京都味の素スタジアムが挙げられる。この2つのスタジアムは、前者は埼玉高速鉄道の浦和美園駅、後者は京王線の飛田給駅から徒歩5分～10分とアクセスが抜群に良く、大多数の人が各駅を利用する。試合前は各人がバラバラの時間に来場するためさほど問題はないと思うが、試合後は一斉に駅に向かうため、これ以上ないほどの密状態が発生する。行きは5分程度の道のりも、帰りは30分以上かか

る。その後も駅のホームや電車内と試合後は密な状況が多発する。現在、座席ごとに退場可能時間、退場可能ゲートを分けるなどの対策はしているが、緩和後の人数が増えた状況でも対応できるだろうか。

地域ごとの感染状況に応じて、柔軟に緩和を進めることが望ましい。

第6章 新型コロナウイルスによる影響

第1節 試合開催への影響

6月末にJリーグが再開した後、リーグ全体としては概ね予定通りに進んでいる。しかしクラブ単位で見れば新型コロナウイルスの影響を受けた事例もある。再開後のJリーグが抱える目下の課題は「陽性判定者が出たクラブへの対応」である。Jリーグでは再開に先立つ6月19日（金）から約2週間に1回の頻度で全56クラブの登録選手・チームスタッフ、Jリーグ登録審判員、その他関係者を対象にPCR検査を実施している²⁹が、それでも試合中止、さらにはチーム活動の自粛を余儀なくされたケースがある。

再開後初めての中止事例となったのは、7月26日（日）に開催予定だったサンフレッチェ広島と名古屋グランパスの試合である。試合前日の25日に名古屋の選手1人が陽性判定を受け、選手・スタッフ60名にPCR検査を実施した。その結果、新たに選手1人と、スタッフ1人に陽性反応が出た。2人は最初に陽性判定を受けた選手の濃厚接触者には該当しなかった。3人が陽性であることが確認され、新たな2人の陽性者の濃厚接触者の指定が早くても26日夕刻とされ、同日18時キックオフの試合に向け名古屋側が試合メンバーを組める可能性が低いとJリーグが判断したことから、試合中止が決定された³⁰。前例のない状況で試合開催の是非が問われたこの件は、クラブ・リーグ関係者にとって難しい決断を迫られたことだろう。

8月2日（日）、大宮アルディージャとアビスパ福岡の試合が中止になった³¹。Jリーグ公式検査の結果、福岡の選手1名に対し陽性の可能性が非常に高いと判定されたことを受け、医師による陽性診断がなされた場合、試合開催前に濃厚接触者の特定ができないことが確認されたためである。当該選手は翌3日、保健所の指導の下PCR検査を受け、陽性が確認されたという。結果として中止は良い判断だったが、中止の発表が試合開始の1時間前であったことは驚きであった。サポーターがスタジアムに入り、先発メンバーも発表され、あとは試合を待つのみという状況での突然の発表であった。監督、選手、クラブスタッフやサポーターにとって寝耳に水の事態であったことだろう。名古屋の場合は試合開始の7時間

²⁹ Jリーグ「再開・開幕に先立ち登録選手へPCR検査を実施」2020年6月19日

<https://www.jleague.jp/news/article/17219/>（2020年11月28日閲覧）

³⁰ 名古屋グランパス公式サイト「7/26（日）サンフレッチェ広島戦 試合開催中止のお知らせ」2020年7月26日

<https://nagoya-grampus.jp/news/game/2020/0726726-1.php>（2020年11月27日閲覧）

³¹ Jリーグ公式サイト「大宮アルディージャ vs アビスパ福岡 開催中止のお知らせ」

2020年8月2日

<https://www.jleague.jp/news/article/17524/>（2020年8月19日閲覧）

前の発表であった。スタジアム周辺に人が集まらないうちに発表できれば、スタジアムにおける他人との不要な接触を避け、混乱を最小限にするためにも、開催可否についてはできるだけ早期の決断が求められる。

冬が近づき再び新型コロナウイルスの影響が目立ち始めた 11 月 15 日（日）の愛媛 FC とヴァンフォーレ甲府の試合では、試合前日の 14 日に愛媛所属選手の 1 人に陽性判定が出た。また、保健所による濃厚接触者の判定により、当該選手以外の 4 選手、スタッフ 1 名が濃厚接触者と判断された。すでに見た 2 つのケースと違うのは、PCR 検査の結果を受け、愛媛県知事から正式に試合中止についての強い要請があったということである。県からは「感染経路が不明であることなどから、その他の選手・スタッフについても保健所が実施する PCR 検査を受検し、その結果をふまえて試合を開催すべきとの判断」により、中止を要請された³²という。この県の意見を踏まえた上で、クラブは「新型コロナウイルス感染拡大の第 3 波も懸念される中、陽性者や濃厚接触者以外の選手・スタッフが確実に陰性であることが担保できない状況で試合を開催するリスクなどを考慮した」³³としている。対戦クラブ、Jリーグだけでなく、行政の考え方も開催に大きく影響することを知らしめた事例になった。

これら 3 つのケースと対照的に、試合開催に踏み切ったケースもあった。

11 月 8 日（日）開催のジュビロ磐田と愛媛 FC の試合では、開催可否が二転三転した。同月 5 日に磐田所属選手 2 名が陽性判定を受けた。これを受け選手 31 名、スタッフ・関係者 26 名を対象に PCR 検査を行いスタッフ 1 名が陽性判定を受けた。選手 2 名に関しては、Jリーグ独自の基準に照らし濃厚接触者なしと判断、スタッフ 1 名に関しても、管轄保健所より濃厚接触者なしと認定され、この時点では予定通りの開催とされた。しかし万全を期すために実施された試合前日の PCR 検査で選手 1 名が陽性判定を受け、試合開催の可否は「濃厚接触者が特定され次第協議する」と白紙に戻った。Jリーグと協議の上、陽性判定の選手 3 名、スタッフ 1 名及び Jリーグの基準に照らし濃厚接触疑い者と特定された選手 8 名、スタッフ 3 名を除き試合を開催することになった³⁴。選手 11 名が出場できない状態になったが、無事に開催の運びとなった。磐田の場合は陽性判定を受けた選手が出てから試合まで比較的余裕があったことが功を奏した格好である。

³² 愛媛 FC オフィシャルウェブサイト「2020 明治安田生命 J2 リーグ第 34 節 愛媛 FC vs ヴァンフォーレ甲府 開催中止のお知らせ」2020 年 11 月 15 日

<https://ehimefc.com/topics/topic13529.html>（2020 年 11 月 27 日閲覧）

³³ 愛媛新聞 ONLINE「選手 1 人コロナ陽性 愛媛 FC、甲府戦中止 濃厚接触の 5 人陰性」2020 年 11 月 16 日

<https://www.ehime-np.co.jp/article/news202011160140>（2020 年 11 月 27 日閲覧）

³⁴ ジュビロ磐田公式サイト「11/8（日）愛媛戦 開催決定のお知らせ」2020 年 11 月 7 日

https://www.jubilo-iwata.co.jp/newslist/detail/?nw_seq=7531&year=2020&month=11
（2020 年 11 月 27 日閲覧）

11月14日の鹿島アントラーズと川崎フロンターレの試合では、試合前日の13日に、鹿島所属選手の1人に陽性判定が出た。それを受け当日の早朝より急遽、選手、チーム関係者を対象にPCR検査を実施した。試合の開催可否に関しては「検査の結果並びに保健所による濃厚接触者の特定の結果を受け、Jリーグ及び対戦クラブとの協議を経ての判断」³⁵とされ、一気に不透明感が高まった。その後、所属選手6人が濃厚接触者と判断され、当該選手及び濃厚接触者の計7選手を除き、試合を開催することが決定した³⁶。この後、両チームに関して感染の情報は入っていない。開催決定は、結果的に好判断だったと言える。

中止したケースと予定通り開催したケースの違いは「試合開始前までに、陽性判定者の濃厚接触疑いを特定できるか」にあると言えるだろう。特定できれば、磐田や鹿島のように陽性判定及び濃厚接触疑い者を除き試合を開催することも可能になる。もちろん他のクラブ関係者が全て確実に陰性であるという保障はないが、これが現状の最善の策だと思う。加えて「最初の陽性判定者が出てから試合までの期間」も重要な要素と言える。その期間が長ければ長いほど特定できる可能性は高くなる。名古屋、福岡は前日の発覚で特定が間に合わず、磐田は3日前の発覚で比較的余裕があった。しかし、前日に発覚した鹿島は開催に至った。今後、より検査体制が拡充し、迅速な検査が可能になれば、直前の発覚でも試合が開催可能になる可能性は高まるだろう。

第2節 チーム活動への影響

前節では陽性者の発生により試合運営に影響が出た事例について書いたが、チーム内で感染が広がり、より大きな影響が出た事例もある。いわゆる「クラスター」が発生してしまうと、活動自粛など感染者が出たチームだけでなく、試合延期などにより対戦予定だった他クラブにも影響が出る。

大きな話題になったのはサガン鳥栖である。すでに紹介した名古屋、福岡など鳥栖以前に感染者が出て試合中止になった例はあったが、クラスター感染が発生してしまったのは鳥栖が初めてであった。

鳥栖で最初に感染が伝えられた金明輝（キム・ミンヒ）監督は8月10日に陽性判定を受けた。これを受け翌11日、クラブは選手・スタッフ89名を対象にPCR検査を実施し、ト

³⁵ 鹿島アントラーズ オフィシャルサイト「トップチーム選手1名の新型コロナウイルス感染症陽性判定の疑いのお知らせ」2020年11月14日

<https://www.antlers.co.jp/news/release/80091>（2020年11月27日閲覧）

³⁶ 鹿島アントラーズ オフィシャルサイト「トップチーム選手1名の新型コロナウイルス感染症の陽性判定のお知らせ および、2020明治安田生命J1リーグ第27節 川崎F戦開催決定について」2020年11月14日

<https://www.antlers.co.jp/news/release/80093>（2020年11月27日閲覧）

ップチームスタッフ3名、選手6名の陽性が確認された³⁷。12日に実施予定だったYBCルヴァンカップ・グループステージ第3節のサンフレッチェ広島戦は中止。チームは11日から25日まで活動休止とし、同期間に開催予定だったJ1リーグ第10節のガンバ大阪戦、第11節のベガルタ仙台戦、第12節の北海道コンサドーレ札幌戦は延期となった。17日に実施した検査では対象123名全員の陰性が確認され、活動再開に向けて大きな一歩になったと言える。

鳥栖の竹原稔代表取締役社長は12日に緊急の記者会見を開いた。責任を痛感している趣旨の発言の傍ら、「どこのチームに起きてもおかしくないと思っている」と発言した³⁸。それは間違いのないことであり、感染者が出たこと、クラスターが発生してしまったことを責めることはできない。しかし、当事者である社長の発言としてはいささか不適切で、半ば開き直ったような印象も受ける。事実、鳥栖の対応には多々問題があったようである³⁹。

金監督の陽性が判明したのは10日であったが、発熱および咳、味覚障害・嗅覚障害、倦怠感等の症状こそないものの、8日の昼には微妙な違和感があったという⁴⁰。しかし同日夜に行われた鹿島アントラーズとの試合では通常通り指揮を執った。9日に佐賀に戻りスタッフとミーティングを行ったが、倦怠感を覚え、夜に発熱したという。しかし翌朝には熱が下がっていたことから練習に参加した。倦怠感を理由に病院を受診、PCR検査を受け同日午後後に感染が判明した。

問題は9日である。なんと同日のスタッフミーティングでは互いにマスクを着用していなかったという。さらに監督は発熱を即座にチームに報告しておらず、チームが把握したのは10日であったという。検温などは実施していても、その結果が共有されなければ意味がない。発熱の有無や体調不良の報告など選手、監督個人の勇気を持った行動も大切だが、ク

³⁷ サガン鳥栖公式ウェブサイト「PCR検査結果のお知らせ」2020年8月12日
www.sagan-tosu.net/news/p/4739/（2020年8月19日閲覧）

³⁸ ゲキサカ「クラスター発生で陽性者10人...鳥栖がチーム活動自粛へ『どこのチームに起きてもおかしくない』」2020年8月12日
<https://news.yahoo.co.jp/articles/f37db592e92191be71346579015a2d68fa368f34>
（2020年8月19日閲覧）

³⁹ テレビ東京スポーツ「クラスター発生のサガン鳥栖 ミーティングでマスクせず 監督発熱も報告遅れ」2020年8月13日
<https://www.tv-tokyo.co.jp/sports/articles/2020/08/013008.html>
（2020年8月19日閲覧）

⁴⁰ サガン鳥栖公式ウェブサイト「新型コロナウイルス感染症の陽性判定について」
2020年8月11日
<http://www.sagan-tosu.net/news/p/4736/>（2020年8月19日閲覧）

ラブのリスクマネジメントも求められる。

各種報道が正しいとは限らないため全てを鵜呑みにすることはできないが、一連の報道を見る限り、鳥栖はクラブの対応に不備があったと言わざるを得ない。もちろん感染、クラスター発生について責めることはできない。しかし、このようなクラスターが発生すれば自チームはもちろん、他のチームにも負担がかかる。試合延期となったガンバ大阪、仙台、札幌は試合が後ろ倒しになり、ただでさえ過密を極める日程がさらに厳しくなる。

11月には柏レイソルで集団感染が発生した。11月2日(月)に所属選手1人の陽性判定、スタッフ2名の発熱が確認されると、濃厚接触疑いの確認が難しいことから翌3日のベガルタ仙台戦の中止が決定。その後も陽性者が増え続け、監督をはじめ選手やスタッフなど計16人が陽性となり同月7日(土)のYBCルヴァンカップ決勝、14日の大分トリニータ戦が中止となった。ルヴァンカップ決勝は2021年1月4日(月)の開催が決定したが、その分だけシーズン終了後のオフ期間が短縮され、十分な休みの取れないまま来シーズンの開幕を迎えることになる。今回の集団感染は来年まで影響を与えるかもしれない。

Jリーグの村井満チェアマンは、最初に感染が確認された選手が、陽性判定を受ける2日前に体調不良を訴えていたが、「持病の鼻炎の症状が出た感覚でいたようだが、この時点が感染、発症した日付であった可能性がある」⁴¹と話す。鳥栖のケースと同じく、初期症状への対応に課題があったと言える。これはクラブ側が完璧に管理するのは難しく、選手1人1人の勇気ある行動が必要になる。

第3節 クラブ経営への影響

この新型コロナウイルス禍で、突如として経営難が報じられたのが、前節でも名前が挙がったサガン鳥栖である。人口7万人の佐賀県鳥栖市をホームタウンとするクラブは2012年のJ1昇格以降、日本最高峰の舞台で戦い続け、「地方クラブのロールモデル」と言える存在であった。そんな鳥栖が4月26日、定時株主総会と19年度決算報告を行い、約20億円の赤字を計上したと発表した。J1昇格以降の最大赤字は18年度の約5億円で、その4倍にもなる前代未聞の赤字である。昨年度は営業収入も大きく落ち込んだ。18年には約42億円であった営業収入が、約25億円にまで激減した⁴²。

⁴¹ NHK NEWS WEB 「Jリーグチェアマン 柏のクラスター発生で指針修正へ対応急ぐ」

2020年11月16日

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20201116/k10012714591000.html>

(2020年8月19日閲覧)

⁴² 日刊スポーツ「鳥栖赤字20億円『天文学的数字。明日はあるのか』」2020年4月26日

<https://www.nikkansports.com/soccer/news/202004260000243.html>

(2020年5月7日閲覧)

きっかけとなったのはスポンサー収入であった。2015年7月、急成長を遂げていたスマートフォンゲーム大手、株式会社 Cygames（サイゲームス）と年間5億円ともいわれるスポンサー契約を結んだ。ビッグスポンサーを得たことで、サガンは「リーグ優勝」を本気で目指すフェーズに入り、チーム人件費をどんどん挙げてきた。その象徴的な例が2018年8月、元スペイン代表のエースストライカーとして名を馳せたFW フェルナンド・トーレスの獲得である。同時期に神戸入りを決めたイニエスタとともに大いにJリーグを賑わせたが、徐々にクラブの経営に軋みが生じて行く。2019年1月末、ビッグスポンサーとしてトーレス獲得を支えた Cygames が、親会社である株式会社サイバーエージェントがJ2リーグ所属のFC町田ゼルビアの筆頭株主となった関係で撤退した。後を追うように、推定年俸8億円とされたトーレスの報酬を補填する形で新規契約したはずのスポンサー3社も撤退した。スポンサー収入の激減に対して人件費が追い付かなくなった⁴³。19年度売上約25億円に対し、チーム人件費は約24億円に達するという。もちろん積極投資は大切だが、スポンサー収入依存の危険性を思い知らされる一件となった。

気がかりなのは、この経営難が全て新型コロナウイルスの発生前の出来事ということである。全クラブが売り上げの減少する苦しい状況に陥っているが、20億円もの赤字を抱えた鳥栖の窮状は群を抜く。売り上げがなくなる有事も見据え、健全な、身の丈に合った経営は意識すべきだろう。

9月下旬、J1のベガルタ仙台が緊急募金を開始することを発表した⁴⁴。募金の呼びかけページでは「当クラブもコロナ禍の影響により、厳しい決算を見込まざるをえない、極めて厳しい状況」とあり、鳥栖とは少し異なり、純粋に新型コロナウイルスの影響がクラブの経営に大きな打撃を与えていると見える。

営業収益は合計で予算比10億円マイナスの約18億円、一方営業費用は予算比で3億円マイナスの25億円を見込んでおり、約7億円の営業損失を見込まざるをえない現状にあるという。見込み通りとなると損失が前期末の純資産3億5,600万円を大きく上回り、今期末は約3億5千万円の債務超過となる。

新型コロナウイルスの発生から1年が経ち、このような経営に関わる事態は、徐々に明らかになってくるかもしれない。

⁴³ THE PAGE「20億円赤字の鳥栖は本当に存続できるのか？問われる竹原社長の攻撃的経営の真価」2020年4月27日

<https://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20200427-00010000-wordleafs-socc>

(2020年5月7日閲覧)

⁴⁴ ベガルタ仙台公式ウェブサイト「ベガルタ仙台クラブ緊急募金のお知らせ」

2020年9月26日

<https://www.vegalta.co.jp/news-club/2020/09/post-553.html> (2020年9月29日閲覧)

第7章 再開して見えたこと

7月10日より、2月末のJ1、J2リーグ開幕戦以来約4か月半ぶりに、サポーターがスタジアムに戻ってきた。人数制限があり、まだまだ非日常の風景ではあるが、無観客の時とは雰囲気が全く違うことが画面越しにもよく伝わってきた。実際にプレーする選手は、その違いをはっきりと感じていることだろう。段階的に以前の風景が戻りつつある。その過程の中で新たな発見があった。

応援については既に述べたような規制がある。再開当初に許された行為は実質、「拍手」のみであった。しかしこの拍手の効果が思いのほか大きい。特に守備面など、普段はチャントに流され注目されにくいプレーにも、拍手のみが送られる環境では選手にその評価がダイレクトに伝わる。選手も「今のプレーがサポーターに評価された」と感じる機会が多くなれば、モチベーションも上がるだろう。海外では平時からチャントをあまり歌わず拍手重視の応援スタイルのチームもある。90分間だらだらとチャントを歌い続けるより、むしろメリハリがあって良いかもしれない。少なくとも画面越しでは、拍手のみの応援も思いのほかポジティブに感じた。

また、拍手のみになって最もポジティブな要素は汚い野次やブーイングがなくなったことである。建設的批判、叱咤激励は結構だが、コロナ前にはサポーターのストレス発散としか思えない野次やブーイングが目についた。これは選手だけでなく周りのサポーターにも非常に迷惑な行為であり、これらがなくなったのは非常に良いことである。

一方、有観客となっても「リモート応援システム」を採用するクラブがある。自宅観戦する人は今まで通り、スタジアムで観戦する人もスマホから応援という形である。観客がいるのにスピーカーからチャントが流れるというのは奇妙に見えるが、観客がおり、チャントがあれば、画面越しにはかなり違和感の軽減された試合になっている。

一方、課題もあった。これは主にファン・サポーターのモラルの問題になる。医療従事者、Jリーグ関係者など多くの人々の尽力のお陰でJリーグは再開を迎えることができた。しかし残念なことに、そのような人々の努力など露知らず、自分勝手な行動でルールを破ってしまう人間が存在することも事実である。

J1のリモートマッチが始まった7月4日、悪い意味で注目を集めてしまったのが川崎フロンターレである。この日の試合はNHK BS1で生放送された。その番組冒頭に流れた選手のスタジアム入りの映像で、その周辺に集まり、写真を撮るファンの姿が捉えられていた。詳細は不明だが、ネット上に掲載された写真を見る限り数十人単位で集まっていた。川崎のホームスタジアムである等々力陸上競技場は等々力緑地の中にあり、スタジアム周辺は一般の公園である。そのため入場規制などが難しい。実際、映し出された映像の中には私服の人が多く、意図的に集まったのか、たまたま通りかかったのかの判別も難しい。しかしそれは言い訳にはならない。なんのためのリモートマッチなのか。今後、再び無観客となった場合にはそのことをよく考えて行動してもらいたいが、最終的には各人のモラルの問題にな

るのでなかなか難しい。

有観客となってからは、各地で手拍子などの禁止行為が見られたようだが、悪い意味で圧巻だったのは浦和レッズである。試合開始後しばらくして、明らかに選手のものとは思えない声が聞こえてきたとき、最初はリモート応援の一種かと感じた。しかし次第にはっきりと聞こえてくるブーイングや指笛。こちらは悪い意味で普段と変わらない試合の風景になっていた。特に指笛は危険性の高い行為である。指笛の際には、おそらくマスクは外している。飛沫が飛ぶ。間違いなく指を口の中に入れていた。そしてその手で周囲のものを触る。指を口に入れる行為により自分自身の感染可能性がある。もし感染者なら、口に含んだ手で周囲のものを触れば、新たな感染源が発生する。コロナ禍のサッカー観戦において、指笛は最も警戒されるべき行為である。

第8章 今後のJリーグの姿

新型コロナウイルスの発生から約1年が経過した現在でも未だ収束は見えず、感染の再拡大も見受けられる。スペインは未だ無観客での開催が続き、イタリアやイングランドでは12月に入り、ようやく有観客での開催が認められた。このような欧州の情勢を考えると、日本のJリーグは比較的順調に本来の姿を取り戻しつつあると言える。

J2、J3が6月27日に、J1が7月4日に再開して半年、リーグ中断などの大事には至らず無事にシーズンを終了したが、以前の姿とはまだほど遠い。コロナ禍を経た今後のJリーグの姿は、従来と比べいかに変化するのか。筆者の観戦経験を踏まえ、変化のポイントをいくつか考察する。

第1節 スタジアム観戦における変化

(1) チケットレス化 (QRコードチケット)

真っ先に思いつくのは入場チケットの変革である。日常生活では新型コロナウイルスの流行以降、キャッシュレス決済がしきりに宣伝されている。真偽は定かでないが、現金を通じた感染が問題視されている側面が大きい。チケットは現金のように不特定多数の手に渡るものでなく現金同様に考えることはできないが、時代の潮流にあわせてチケットレス化は進み、QRチケットが普及するのではと考える。

コロナ前からJリーグはQRチケットを推進していた。Jリーグのチケット販売ページでは、①発券手数料無料②スマートフォン、携帯電話、PC(プリントアウト)で受け取り可、コンビニ等での発券不要③友達にメールやLINEでチケットが送信でき、事前に郵送する、試合会場で待ち合わせる必要なし④試合当日のチケット忘れの心配なし、といった利点が並べられている⁴⁵。筆者の経験上、特に便利なのは「友達に事前送信可」と「忘れる心配なし」の2点である。友達数人で観戦に行き、チケット忘れで入場できない人が出たりしたら一大事である。この機会にこれらの利点の周知を徹底するといいたいだろう。

紙のチケットはどうしても、いわゆる「もぎり」の際にスタッフとの接触が生じる。QRチケットは専用端末にタッチするだけなのでこの接触をなくし、感染予防上の効果もある。さらに、もぎりのスタッフや入場者をカウントするスタッフ(すべてのスタジアムに存在するかは不明)などが最小限に抑えられ、また入場ゲートでの混雑を緩和することで密集を避けることもできる。

また、コロナと直接の関連はないが、人気クラブや注目度の高い試合チケットの高額転売

⁴⁵ Jリーグチケット「利用ガイド QRチケット」

<https://www.jleague-ticket.jp/guide/qr> (2020年9月29日閲覧)

が大きな問題になっている。これらの理由から、今後チケットレス化が進むと考える。

(2) スタジアムグルメ

Jリーグを語る上で、スタジアムグルメは欠かすことはできない。津々浦々にクラブが存在するJリーグならではのコンテンツであり、清水エスパルスの富士宮やきそば、ベガルタ仙台の牛たん焼き、ガンバ大阪のたこ焼きなどご当地の名物が食べられる。グルメが主目的でスタジアムを訪れる人も少なくないと思う。スタジアムイベントとともに、サッカー観戦に試合以外の付加価値を作り出すメインキャストである。

そのスタジアムグルメに関する問題点は、注文待ちの行列である。スタジアム内コンコースや周辺のイベント会場など、グルメ売り場の行列はお馴染みの風景であるが、コロナ禍では避けるべきものである。

この問題を解消する手がかりになりそうな事例はすでに存在している。この点で最も先駆的な取り組みをしているのが大宮アルディージャである。アルディージャでは「フード・ファストパス」と「デリバリー」の2つのシステムを導入している⁴⁶。スタジアムグルメを並ぶことなく購入できる「フード・ファストパス」は、クラブの公式サイトを見る限り2018年には実施されていたようである。クラブ公式アプリの専用ページから購入店舗、商品と個数を選択し購入する。決済はドコモのd払い、クレジットカードが利用できる。準備が整ってから商品を受け取りに行くため行列に並ぶ必要はなく、現金を介すやり取りも必要ない。座席まで商品を届けてくれるデリバリーは、座席選択のひと手間以外の利用方法はフード・ファストパスと同様である。店舗まで受け取りに行く必要もなく、密集を最小限に抑えられるシステムと言える。このデリバリーサービスはアルディージャの他に2019年にはジェフユナイテッド千葉、2020年には横浜FCも実施している。横浜FCではスタジアムグルメだけでなく、地元飲食店のフードも配達可能となっている。

筆者は利用したことがないので推測でしかないが、配達人員の確保などは大きな問題になると思う。しかし、これらのシステムには再三述べている「密集を避ける」以外にも大きなメリットがあると考えられる。筆者の経験上からの意見であるが、練習や試合を観ることに集中できる点である。行列に並ぶために試合前練習の見学を諦めざるをえなかったり、行列に並んでいるうちにゴールが決まるなど重要なシーンを見逃すことが度々ある。フード・ファストパスやデリバリーが普及すれば、こういった問題も解消される。このような点も踏まえ、利用者側からのデメリットは特に思いつかない。時代の潮流に合わせ、もっと多くのクラブで導入されてほしいシステムである。

⁴⁶ 大宮アルディージャ公式サイト「フード・ファストパス/デリバリー」

https://www.ardija.co.jp/ticket/fastpass_delivery.html (2021年1月1日閲覧)

(3) 応援スタイル

7月に有観客で再開された当初は「自然発生的な声や拍手」を除き一律で禁止されていた。この後、段階を追って手拍子、拍手、太鼓など自席で使用できる鳴り物と徐々に規制が緩和され、スタジアムに音が戻ってきた。しかし、最大の焦点は「声」だろう。Jリーグでは試合が行われている90分間だけでなく試合前から、サポーターが途切れることなく声援を送ることが普通であったが、コロナ禍で厳しく制限されている。得点後など要所で声が出る場面はあるが、「チャント」と呼ばれる応援は規制されたままである。

筆者はスタジアムに行ってチームごとに特徴のあるチャントを聴くのが好きで、チャントはJリーグの文化の1つだと思っている。再開当初は「チャントのないスタジアムなんてありえない」と思っていたが、思わぬ発見があった。再開から約半年が経って、チャントのない試合に慣れてしまった。もちろん、実際にスタジアムに行くと感覚は違うかもしれないが、少なくともテレビで観戦する限り違和感はなくなった。ブーイングや汚い野次が減ったこともポジティブな変化である。

現実的に見て、チャントの規制解除は当分難しい。12月2日から、コロナ禍後初めて有観客での試合開催が認められたイングランドのプレミアリーグでは、早速サポーターが大声で声援を送っている姿が見られた。マスク着用で周囲との距離をとってはいたが、少々非現実的な風景に見えた。チャントは飛沫感染のリスクが高い。国内の流行が収まってきた、というような段階ではなく、真に終息したと言える段階にならないと難しいと考える。

チャントなしの試合にも、すでに述べたようなポジティブな側面もある。チャントがないと嘆くのではなく、すでに許可された手拍子や太鼓など、可能な範囲で最善の応援スタイルを見つけることが大切であろう。

第2節 サッカーのルールに関わる変化

(1) 「交代枠5人制」の今後

4か月に及ぶ中断の影響で、再開後のJリーグは過去に例のない超過密日程を強いられている。週末に加え水曜日の開催も当たり前になり、1週間に3試合、中2、3日での連戦が珍しくなくなった。連戦が続くと心配なのは選手の疲労と怪我である。その対応策として採用されているのが「交代枠5人制」である。従来、サッカーにおける選手交代は3人で運用されてきたが、コロナ禍で初めて5人までの交代が認められるようになった。

実際に交代枠5人制が実施されてみると、ポジティブな要素が多く見られる。過密日程と相まって、より多くの選手に出場機会が巡ってくるようになった。ファンにとっては、多くの選手のプレーが見られることは嬉しく、選手にとってはモチベーションに繋がる。交代枠が増えたことで戦術的な幅が広がった。今年は大卒・高卒で入団したルーキー選手の活躍

が目立つのも、交代枠増が大胆な選手起用を可能にしている側面がある。「より多くの優秀な選手を揃えられるチーム、選手層の厚いチームが有利」との意見もあるが、ここまで不満の声は少ない。

サッカー有識者の間でも議論を呼んでいるが、筆者が見る限り賛成派が多く見受けられる。なかには交代枠5人制は「禁断の果実」で、一度味わってしまったらもう交代枠3人制には戻れないと語る識者もいるが、筆者も同意見である。5人交代に慣れてしまい、もはや3人交代では物足りなく感じてしまうと思う。

Jリーグは欧州主要リーグ（秋春制）と異なり春秋制のシーズンで夏に開催する試合も多い。近年は温暖化の影響で気温が上がり、夏の試合は過酷さを増してくる。欧州と同じく秋春制への移行を求める声もあるが、現状の日程が続くならば、選手の安全のためにも5人交代は必要だろう。

もちろん世界の潮流も見極めなければならない。サッカーのルールを定める国際サッカー評議会（IFAB）は7月15日、交代枠5人制を20/21シーズンも適用可能とすると発表した⁴⁷。実際に採用するかは各リーグや大会に委ねられる。8月から順次開幕した各国リーグを見てみると、スペインのラ・リーガ、ドイツのブンデスリーガ、イタリアのセリエA、フランスのリーグ・アンが昨季から継続している一方、イングランドのプレミアリーグは新シーズンから従来の3人交代に回帰した。UEFAチャンピオンズリーグ、UEFAヨーロッパリーグなどのカップ戦でも5人制を採用する⁴⁸。全世界のリーグをくまなく見れば3人制の所もあるだろうが、主要5リーグのうち4リーグ、そして権威あるカップ戦でも採用されているとなれば、現在は5人制が世界的潮流と言えるだろう。

サッカーと直接の関係はないが、フランスの人口学者であるエマニュエル・トッド氏は、新型コロナウイルスに関して「新型コロナウイルスのパンデミックは歴史の流れを変えるのではない。すでに起きていたことを加速させ、その亀裂を露見させると考えるべき」と述べる⁴⁹。5人交代制についても同じことが言えるかもしれない。5人交代制への移行はサッカーの歴史を変える抜本的な変化のように見える。しかし、そもそもサッカーは選手交代がいっさい認められないスポーツであった。それが1970年にメキシコで開催されたワールドカップで初めて2人の交代が認められ、その枠が3人になり、2018年のロシアでのワールド

⁴⁷ サッカーキング「交代選手5人制度、来年7月31日まで延長可能に...国際サッカー評議会が発表」2020年7月16日

https://www.soccer-king.jp/news/world/world_other/20200716/1096957.html
(2020年10月11日閲覧)

⁴⁸ ゲキサカ「欧州カップ戦では交代枠5人制が継続へ！UEFA理事会で決定、国際Aマッチウィークも一部2試合→3試合に」2020年9月24日

<https://web.gekisaka.jp/news/detail/?311836-311836-fl> (2020年10月11日閲覧)

⁴⁹ 佐藤優 (2020)『危機の正体 コロナ時代を生き抜く技法』朝日新書

ドカップからは延長戦でのもう1人の交代が認められるようになった⁵⁰。そう考えると5人への拡大も歴史の必然で、時間の問題だったとも考えられる。今回のコロナ禍は、それを促進したに過ぎないのかもしれない。そう考えると、5人交代が恒久的な制度となったとしてもある程度違和感なく受け入れられるだろう。

現在、5人制は2021年7月30日までに閉幕する大会で採用可能とされており、この条件の下では、2021年シーズン以降のJリーグでは5人制を採用できない。将来的な見通しは不明だが、5人制が生み出したエンターテインメント性の向上や猛暑といった日本に特徴的な諸条件を鑑みれば、少なくともJリーグでは交代枠5人制の継続が望ましいと考える。

②「クーリングブレイク」の今後

前半と後半の各25分前後に3分間設けられたクーリングブレイクは、このコロナ禍で新たに導入された制度ではなく、従来から熱中症対策として気温が摂氏32度に達した場合、審判の判断で導入することができた。コロナ禍で定着したこの制度は試合にも大きな影響を与えた。このクーリングブレイクでの選手交代や戦術変更などをきっかけに、試合の流れが大きく変わる場面が多く見られたのである。エンターテインメント性は間違いなく向上した。

この点については批判もあるだろう。サッカーはハーフタイムを挟む前半、後半の各45分間が基本的にノンストップで進むスピード感が魅力の1つである。試合が止まる時間は望ましくないという意見もあるだろう。しかし、この意見に関して1つ考えなければならぬのは、すでに各国リーグでお馴染みの光景になり、2021年からは日本でも本格導入される見通しのビデオ・アシスタント・レフェリー（VAR）である。判断の難しいシーンの際に、デジタルの活用で審判の判定を補佐するこのシステムの使用時には、3分～4分程度試合が止まることも珍しくない。VAR導入には否定的な意見も多いが、この潮流は簡単には変わらないだろう。「試合が止まる」という意見だけでクーリングブレイクに反対するのは難しい。

最も、選手のコンディションを考えれば導入すべきだと考える。すでに述べたように、国際サッカー連盟（FIFA）の基準では気温が摂氏32度以上で可能となっているが、高温多湿の日本では摂氏32度に達せずとも熱中症の危険性が高い場面も多い。現在の運用でも問題ないと思えるが、一律運用しないとなっても、日本の諸条件に合った柔軟な運用が求められる。

⁵⁰ サッカーダイジェスト「コロナ後も『5人交代制』は継続すべき？一度”禁断の果実”を味わったら元には…」2020年9月26日

<https://www.soccerdigestweb.com/news/detail/id=79377>（2020年10月11日閲覧）

おわりに

第8章では、第7章までの記述も踏まえ、筆者が重要と考える個別の論点について今後の展望を述べた。締めくくりとして今後のJリーグの、特に本論文の主要テーマである「スタジアムの風景」に大きな影響を与える要素の今後について改めて考察を加える。その要素とは本論文でも重点的に述べてきた「応援規制」と「スタジアム収容人数の制限」である。この2点は国内の感染状況に大きく左右される。新型コロナウイルスの発生から、またJリーグ再開から今日まで感染の増減局面はいくつかあり、今後どのように推移していくか予想するのは難しいが、自分なりの考えを述べたい。

応援については、2020シーズン終了時点で「拍手や手拍子、自席で使える太鼓などの鳴り物」が許容されている。今後の感染状況がどう転んでも、この3点は最低限許容されると考える。これらは感染のリスクがあまり高いとは考えられない。無観客での開催にならない限りは、2020シーズンの再開直後に見られたような無音のスタジアムには戻らないだろう。ウイルスが、拍手や手拍子で感染リスクが高まるような特殊な変異を遂げれば話は変わるが、基本的にはこの3点は享受できると思う。そして激動の2020シーズンを通して、この3点だけでも、十分にJリーグの姿が成り立っていくと筆者は感じている。

入場制限に関して、2020シーズン終了時点では「スタジアムの入場可能数の50%、入場可能数が1万7千人以上の場合30%程度」となっている。入場制限は応援と違い、相当に国内の感染状況の影響を受ける。感染の拡大を受け、政府は年末にイベント開催時の入場制限を再び5千人に制限した。同時に「既に販売したチケットのキャンセルは求めず、新規販売で上限を超えないよう要請」という措置も取られたため、年末年始に開催される天皇杯JFA全日本サッカー選手権大会の準決勝と決勝およびJリーグYBCルヴァンカップ決勝への影響は最低限に留まる。しかし2月末には2021年シーズンが開幕する。今後の感染状況によっては2020シーズン再開直後のような厳しい制限、または無観客でのリモートマッチもあり得る。こればかりは感染状況の推移に依存すると言うほかない。改めて考えてみると、現在は応援、入場含め多くの部分で、かなりの規制が緩和されていると思う。声を出せる日はまだ遠いとしても、ひとまず現在の状態が継続できることを願う。

結論としては、応援や観客動員に制限がかけられ、コロナ前の水準には戻らない状況は当然続くだろう。それでも、一定数の入場は認められ、手拍子や太鼓などの使用は認められている。もちろん、何の制限もなかった状況と比べると不自由や不満を感じることはあるだろう。しかし、この2020シーズンを通して、少人数の観客でも、また制限のある応援スタイルでも、選手にとっては大きな力になることは証明された。

コロナ前のスタジアムの風景はもう戻ってこないかもしれない。それでも、過去と比較して制限を嘆くより、許容されているスタイルで最大限の声援を選手に送り、ファン・サポーターはサッカー観戦を最大限に楽しむ。サッカーに限らずこの世界に生きる全ての人に言えることだが、目の前の現実を受け入れ、その中で最大限の楽しみ方を見つける。新時代の

Jリーグにおいても、その姿勢が大切になるだろう。